江戸名所図會

六

839
20
57

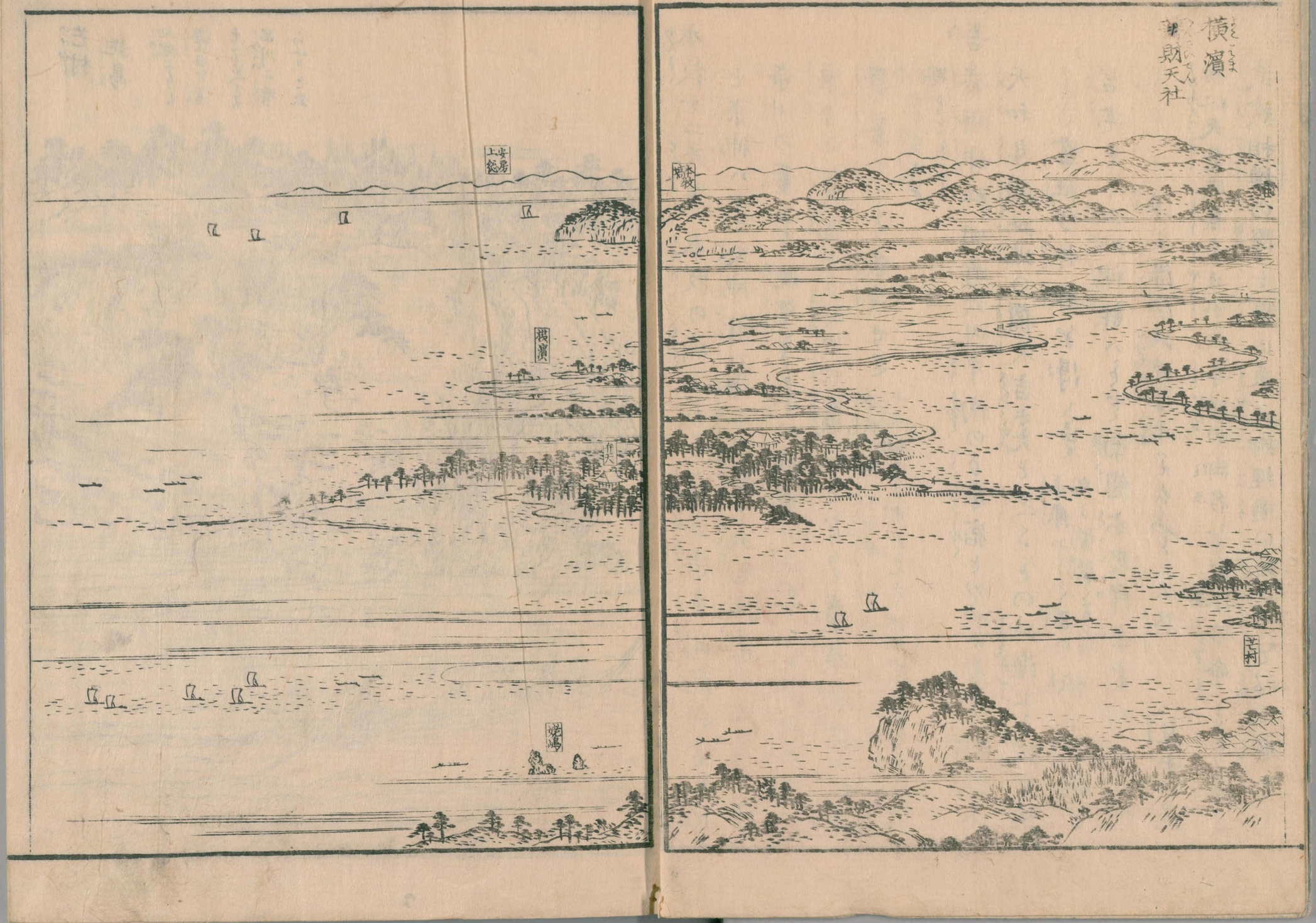
国立国会図書館　タイトル『江戸名所図会 7巻』 請求記号 839-57

ガラス使用

本牧十二天宮　本牧の堝よあり真言宗多聞院別當奉祀
也祭神八十二天神躰ハ海上出現と云ふ佳景の地なり神
奈川の臺より眺望もろ〳〵の絶壁ハもろ〳〵此社の右方
巖頭數株の老梅裏手ハ聳立もろ〳〵の巨巖こゝもまた
鬱蒼とし〳〵栄茂せり

五十貫文を領

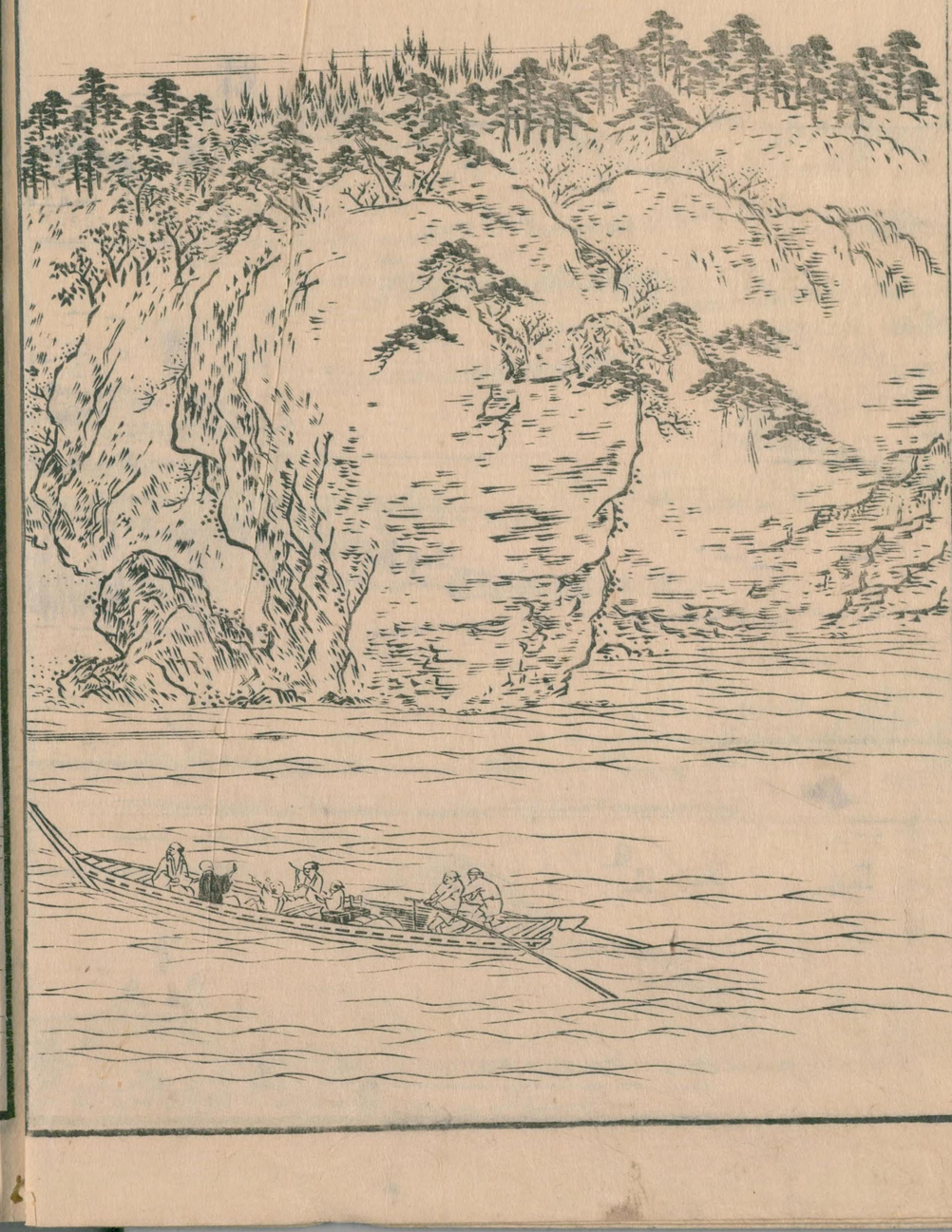
吾妻明神社　同所六町斗南の方原宿といふあり相傳ふ
天和年間此地の獵人吉左夫と本牧の地ハ小田原北条家の分限帳より左衛門太夫領もる由
いふもの此海上より網を投しに水像の雛の如き小祠を
得たり因て當社の神躰を浮べ置しとぞ又一説に髪髻
ともいふ云此神躰ハもと南總水更津吾妻明神の神
霧ゆゑ〳〵浪より漂ひ此地より止るものゝよし祭神ハ第十一代
垂仁天皇の皇子日本武尊初の御名をは小碓命とや奉る
武藏相模の際を尊の東征御經過の地なるを以て所々



国立国会図書館　タイトル『江戸名所図会 7巻』 請求記号 839-57
ガラス使用

芒村
姥島

此地のりも
海苔を産
もとのくとも
品川よ増
らすと云



国立国会図書館　タイトル『江戸名所図会 7巻』 請求記号 839-57

ガラス使用

ろんりくのえの
本牧塙
ほんもくてんのやしろ
十二天社

国立国会図書館　タイトル『江戸名所図会 7巻』 請求記号 839-57

ガラス使用

本牧 吾妻権現宮

国立国会図書館　タイトル『江戸名所図会 7巻』 請求記号 839-57

ガラス使用

本牧の地ハ神奈川澤の南に續きて海上ふ銳く突出る一方の突地ふして勝區ハ撰る人あり〳〵乃をあふ取とゑへくう按ずるふ本牧の名ハりくハ昔時牧馬の地なるゆゑふこの称ありしものゑ今ハ海利魚鹽の漸とあり漁人の家ゑく岩ふ魚をうれて東海の澤涯及び東郡の市輪り鱗ぐるぐる

彰後撰　御製

曇の　もる　里乃　しるくや　ふれるらん　ゑゑもと　ゑゑもと　いろり　本牧　彰

奉祀して千歳御神威を仰き奉るも鎮護國家の盛功未代よ及ぶ〳〵ものゑの故あるへ〳〵 詳なる事ハ本所吾嬬森の下よ出るゆゑよこゝに畧せり

杉山神社　新町より八町あり北の方下星川村よあり延喜式内の神社ゆゑく靈蹤尤掲然〳〵今ハ日蓮宗法性寺と いふものり兼帯奉祀しく釋迦如来を本地佛とせり例祭ハ毎年六月十四日よ修行也

延喜式神名帳曰　都築郡一座小
杉山神社
續日本後紀第七日
兼和五年二月庚戌武藏國都築郡扮山神社預之
官幣以靈驗
同書曰
同十五年五月庚辰奉授武藏國无位杉山名神從五位下

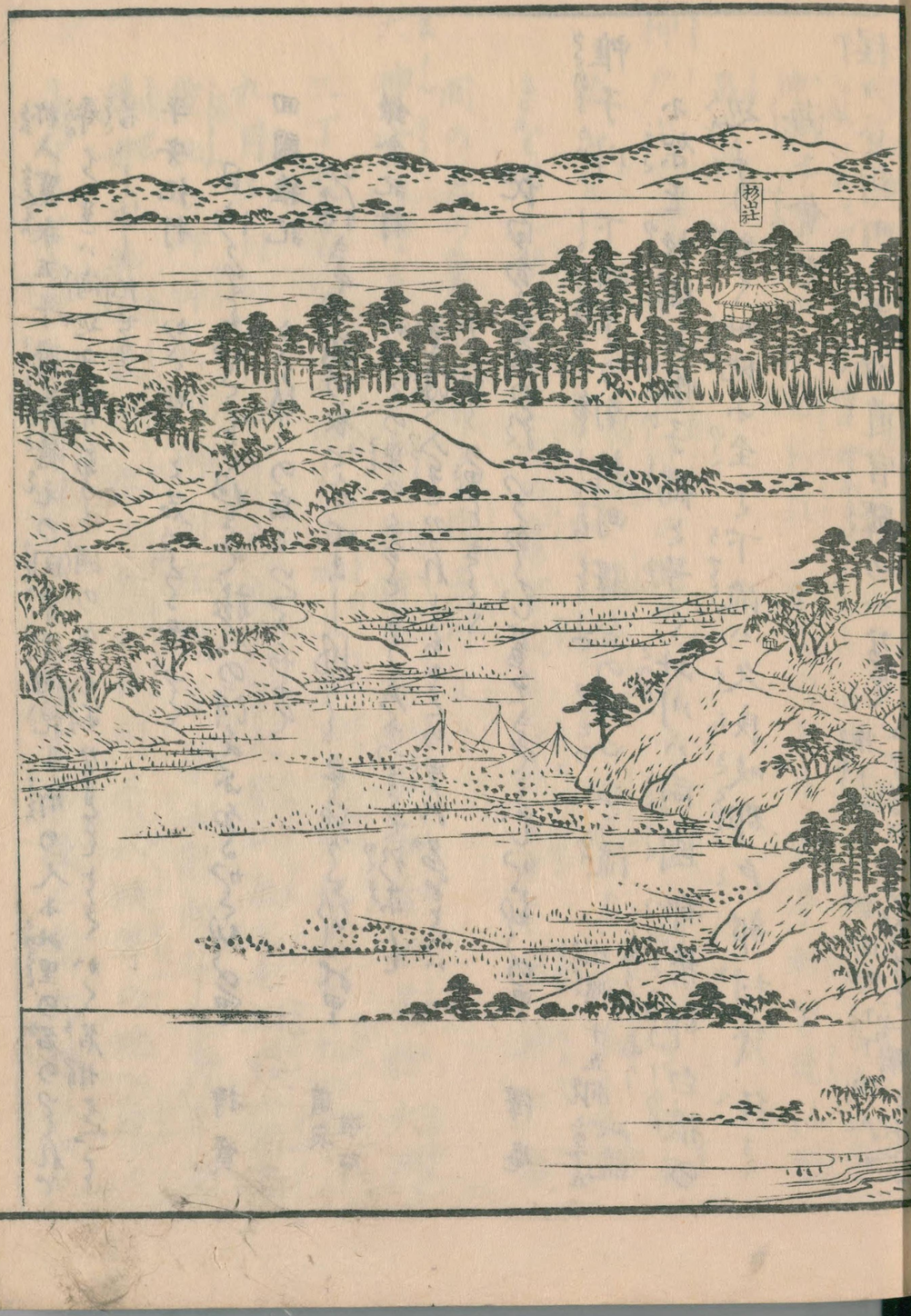
按ふ列本の續日本後紀ふ扮山よ作るも誤なり

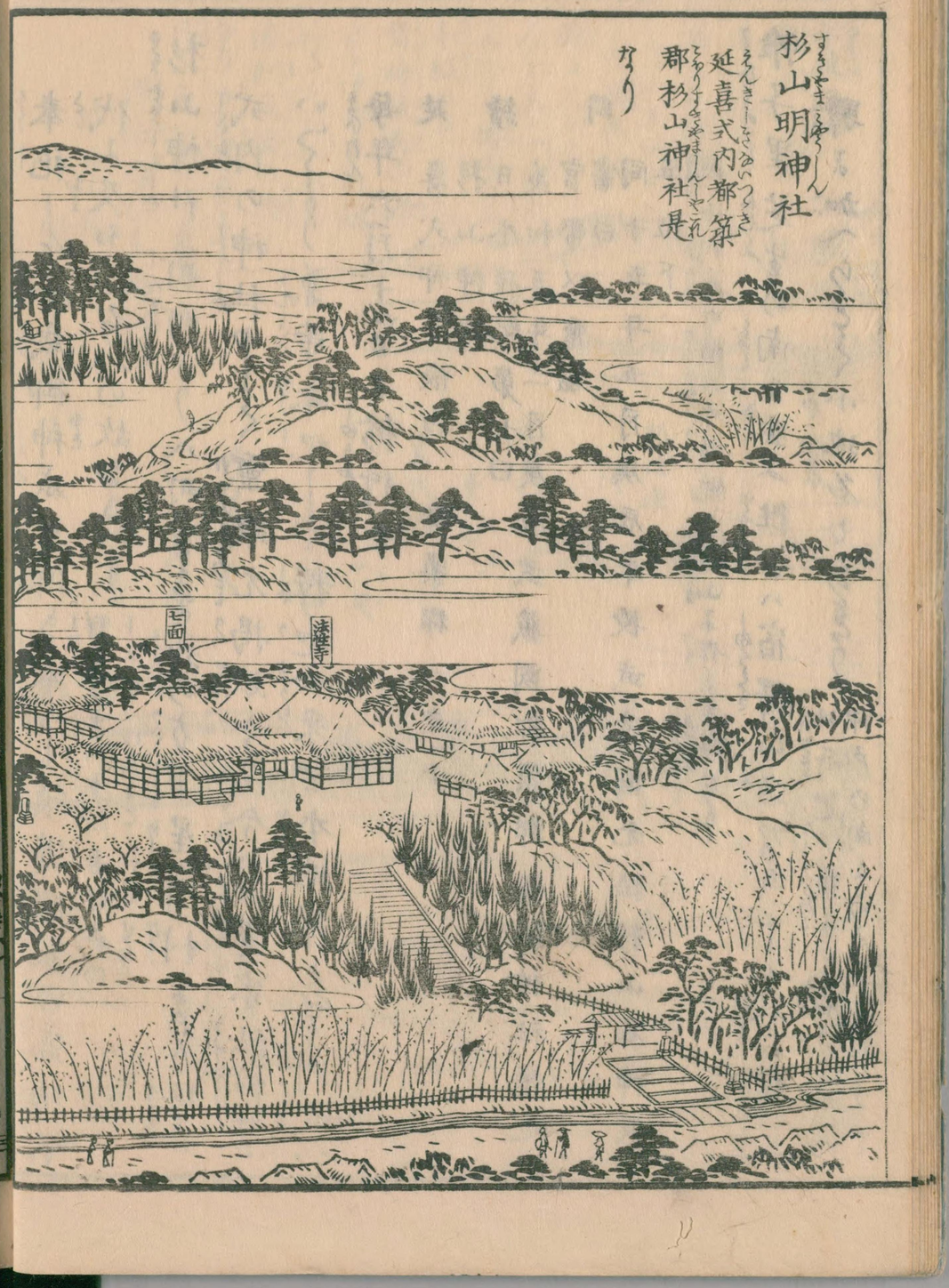
帷子里　芝生の南よ並ふ往古ハ宿驛の名なりしゆ今ハ程ヶ谷驛よ加へらるゝく小地名とあるを

国立国会図書館　タイトル『江戸名所図会 7巻』 請求記号 839-57
ガラス使用

杉山明神社

延喜式内都筑郡杉山神社是なり





国立国会図書館　タイトル『江戸名所図会 7巻』 請求記号 839-57

ガラス使用

称ス寛永五年齋藤徳元の関東下向記ニ所の人ハ此里の名のそれを尋ねまほしハ海辺ハあり〳〵浦のあり〳〵若へしす紀せり

平安紀行　かくもと名づくる所ハ

日ハうそかきそきぬ旅人の汗ふかるかもの里　持資

田圃雑記

いきそう旅の衣とうてまし此里のかしこの里のうそかなれとそのかきつの里　道興准后

鎌倉記行

此白ふる雲のたえまもむすきそくもかくるの里　澤庵

帷子川　下帷子の南新町驛舎の入口を流る　川幅十五間此流

ハ架を板橋と帷子橋と号く此川ハ同國都築郡白根の辺より出く此地ハ久良岐郡戸部村境へ経く

程ヶ谷新町　東海道官驛の一なり

帷子町　上下岩間町　上下神戸町　上下の地を合せて一驛とせり

或ハ慶長或ハ慶安　見原慶安二年又ハ万治年間ともその説一ならす今家の分限帳の三郎と云人の所領ト小机の俗土ヶ谷とあるハ此地を背ハ小机ニ属しゝとおかし

神奈川　此地迄行程二里九町あり驛亭軒を連ね繁昌の地

神戸川　神戸と上帷子との間の小川ゆく長二間ほとを板橋を架しゝを神戸橋と号く土人ハ水源ハ田間の水落集りて流をなし新町ゟ右の裏を流れ此地ゟ至ゟ末ハ神戸岩間の左の裏を回りく帷子川ゟ入

大神宮　神戸の地ハあり街道の右側ゟ鳥居を建て大門三丁あまりを入く社あり神主岡田氏奉祀を祭礼ハ六月九月両月の十六日中〳〵九月を大祭の辰とを相伝ふ往古當社の御神武州御厨庄榛谷峯ゟ影向なしゝを後世川井二股川程ヶ谷宮林同所八坂等の地へ迁しまゐらせしを以て神託あるを以終ゟ嘉禄二年九月十六日

此是武藏帷子郵
別家十日經十州
只思父母不姑舍
夜々夢魂鄉里遊
閻齋

帷子川

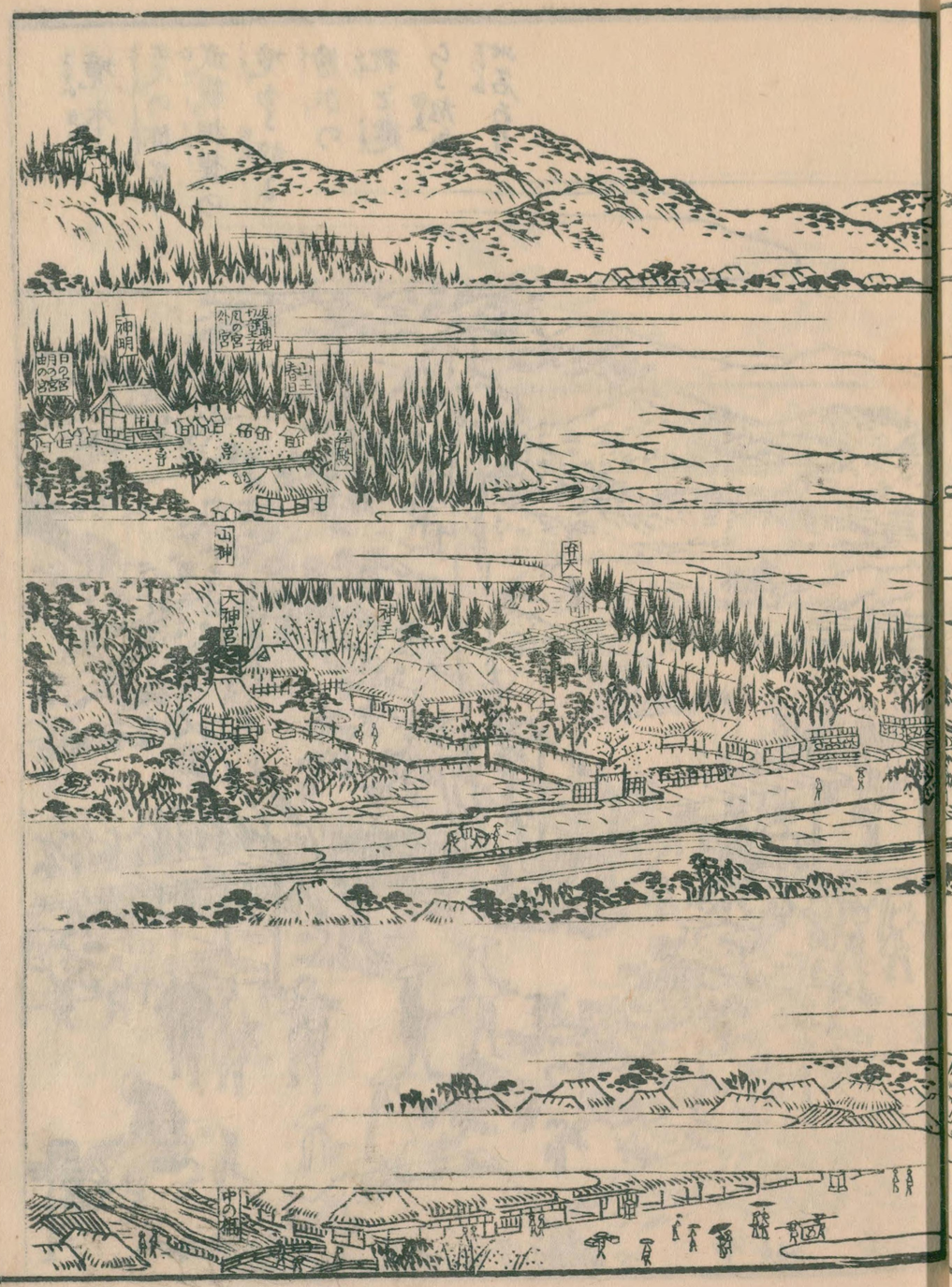
国立国会図書館　タイトル『江戸名所図会 7巻』 請求記号 839-57
ガラス使用

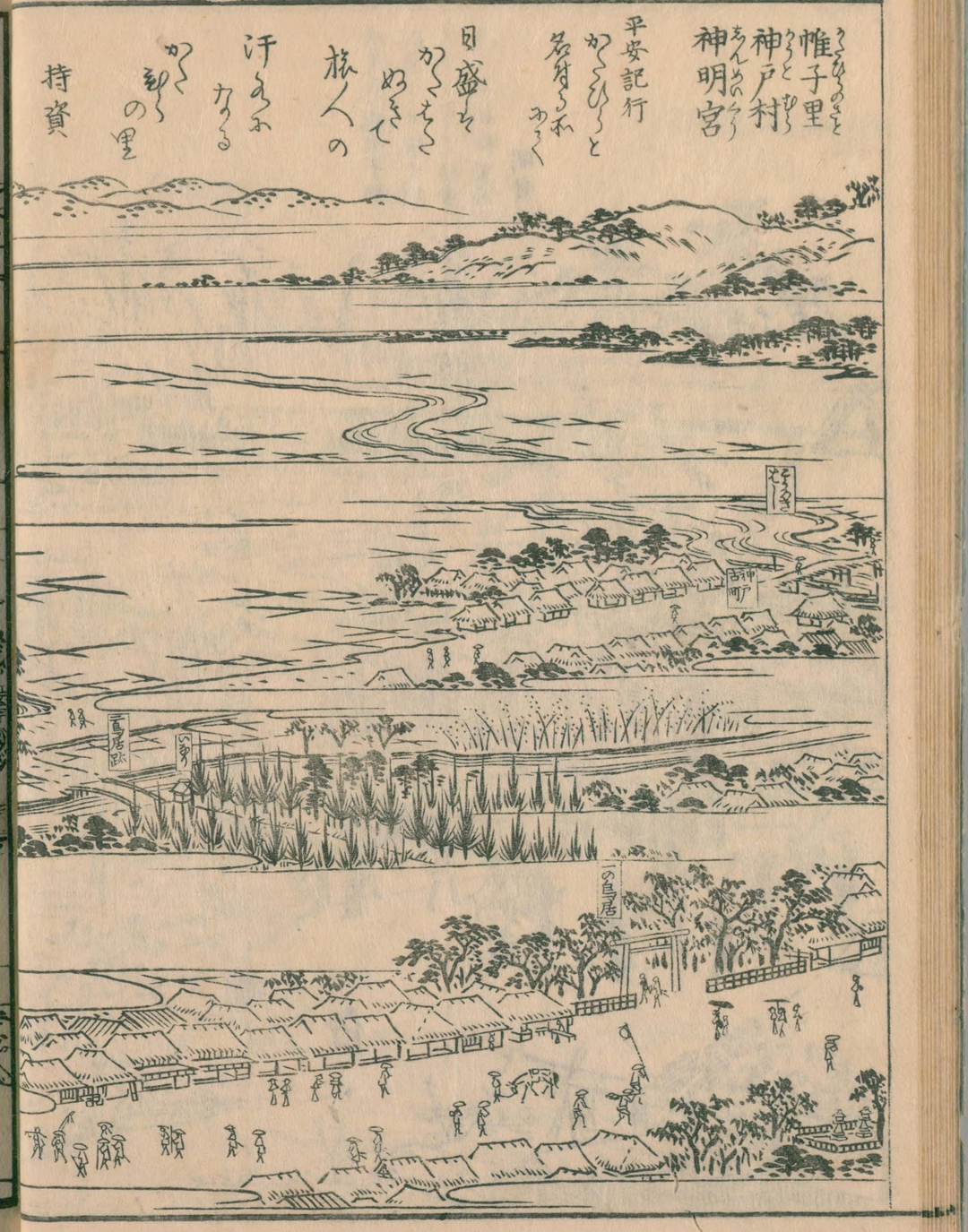
惟子里
神戸村
神明宮

平安記行
かくひくと
名付る木
かく

日盛を
かくもて
ぬきて
旅人の
汗ふく
かくる
かく
の里

持資





国立国会図書館　タイトル『江戸名所図会 7巻』 請求記号 839-57

ガラス使用

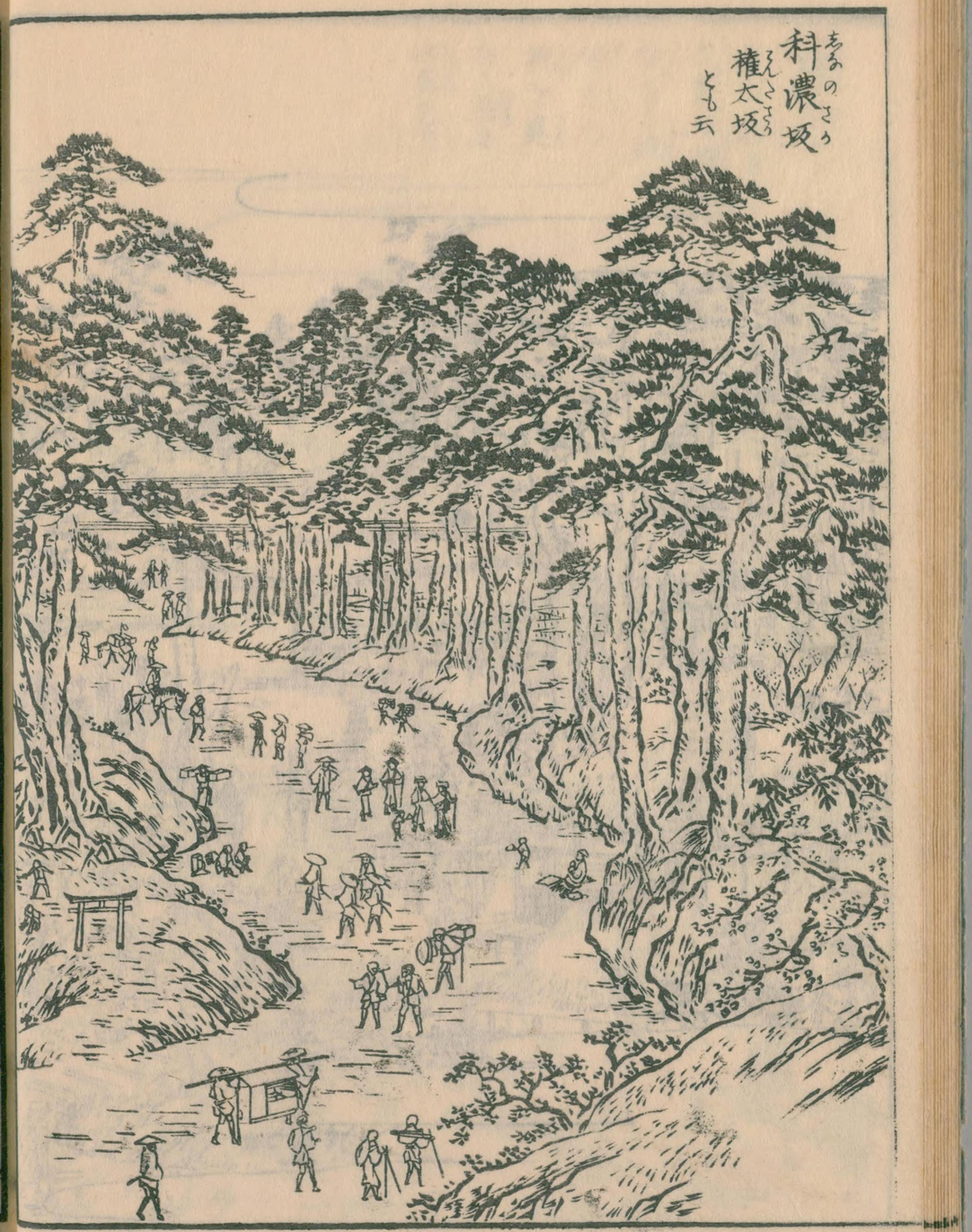
境木
土人の称なり
武蔵相模の
境ある故よ
傍示の
杭を建
らるゝ故
此名あり

国立国会図書館　タイトル『江戸名所図会 7巻』 請求記号 839-57

ガラス使用

本のさう科濃坂

権太坂（ごんたざか）とも云



国立国会図書館　タイトル『江戸名所図会 7巻』 請求記号 839-57

ガラス使用

此山上より迂〻まわり又元和二年三月三日今のやく平地へ宮居を造立をと云見目町神田春日町天神町等の地より古町街道芝生の追分より下惟子の右の裏通りを程ヶ谷の元町へ出る通路ゆ〻く行程十八町ありて則古の街道なり万治二年或ハ慶長或ハ今のやく通路を改られしより裏通りを古町街道と称し今の驛舎を新町とも名〻なり

惟子搗造呑の呂ハ此古町街道を往還の通路とも

界木　立場ゆ〻く道より右より武蔵相模の國界の傍示杭建つゝあり此称あり此地牡丹餅を名産とも是を製する店両三家あり

品野坂或ハ信濃又科野ゟ作る　俗ゟ権太坂と唱へ此地ハ武相の國界なり

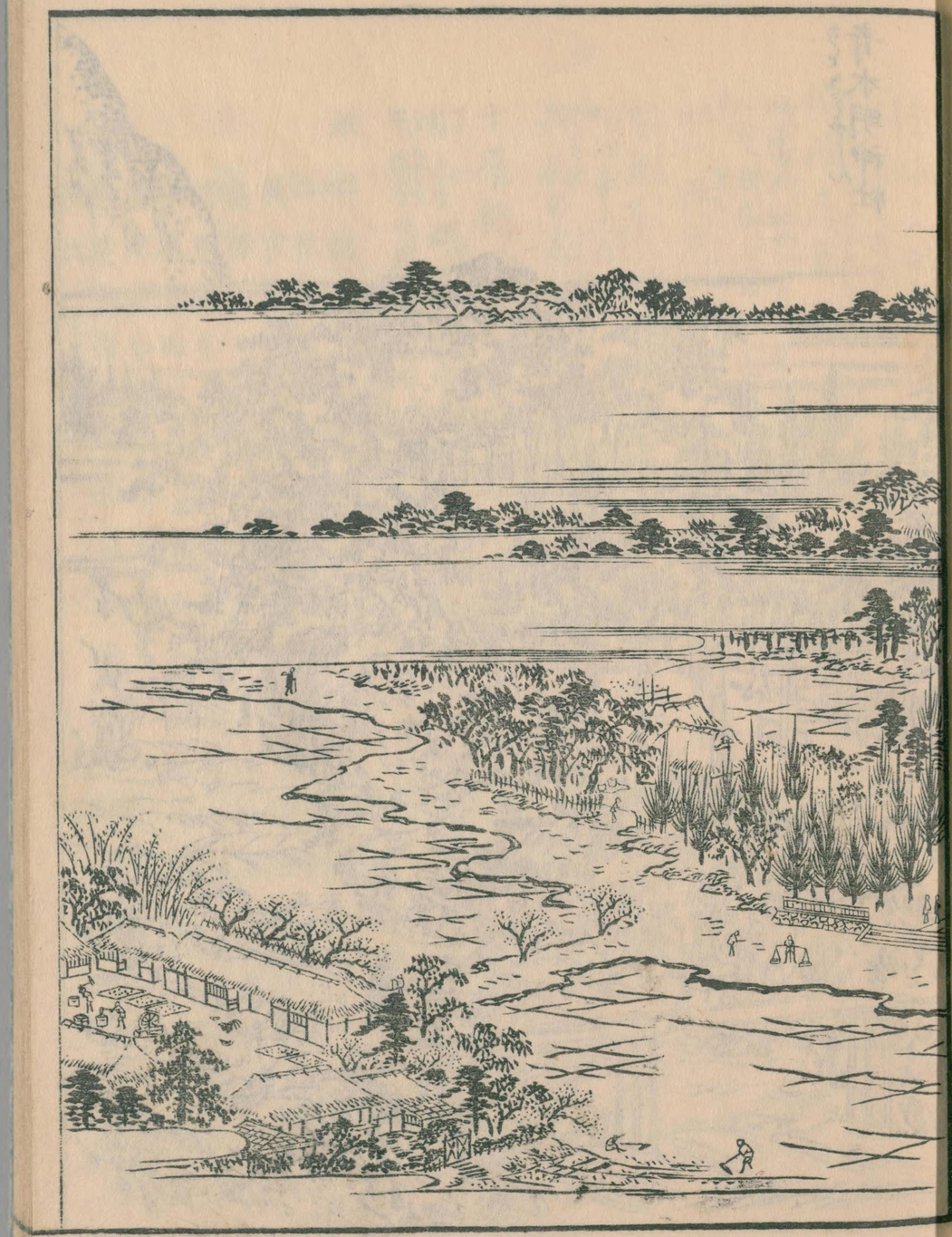
坂路の両傍ゆゑ蒼松の老樹左右ゟ森列ゝゝも坂上ゟく右を望めハ芙蓉の白峯をけつるゝやく左を顧まねをこの砦を討敗とあるハ此地ゟ中世小塁なりし

鎌倉の遠山翠黛濃ゆ〻く実ゟ此地の風光まゝ一奇観と称ゝ春日山日記ゟ謙信鎌倉鶴岡社恭乃節江田稲毛小机小杉権現山品野坂採云海道筋ゟ此地ゟ中世小塁なりし

蒔田城跡　新町より金澤通道蒔田村の内蒔田橋と云の東南の方五町計を隔てゝ道より左ゟあり土人ハ城山と号く封域東南ハ一町ゟ計南北ハ二町餘をなる小丘なり

此地ハ久良岐郡ゟ属せり往古吉良左兵衛佐義門此地ゟ住す小田原記ゟ永禄十年武田信玄小田原を襲んとする条下ゟ八王子筋へ信玄片倉の弟武田孫六入道遯軒と四郎勝頼発向あり小机へハ遯軒と云ハ蒔田と云ハ吉良左兵衛佐ハ其頃大檜山城守康忠北見開加賀守満頼抔相神大寺ゟ筋違ゟ左兵衛佐居住なり此吉良ハ上杉氏族の妹聟ゆ〻く妻女ハ蒔田ゟあり大檜の人数もこれハく多目周防守ゟ小田原ゟ帰陣の者其頃青木と云ハ生くて我構をそ栗田藤兵衛豊前守泰則をふせ蒔田ゟ山の宅を焼拂云同心と五を連れて蒔田を守護ゝゝ軽部

国立国会図書館　タイトル『江戸名所図会 7巻』 請求記号 839-57
ガラス使用



乗蓮寺
かのぜんにえいどう
三位禅尼影堂
すみよしみょうじん
住吉明神社

国立国会図書館　タイトル『江戸名所図会 7巻』 請求記号 839-57
ガラス使用

青水明神社

ありしハ谷吉良のやしきの前なる山おのづから鐵燈をあげ後ハ敵を
来らざるとあり

二位禪尼影堂　井戸ヶ谷村乘蓮寺と云
本尊不動なり慶安二年造立也
真言宗の境内佛殿の側にあり　相傳ふ　此地ハ禪尼分領の地ゆゑ尼公の生前自影堂
尼公の影像ハ
等身なり四十計の齢ゆゑ　と建く乘蓮寺と号せる其後度々
右の御念珠を持しゆゑ
兵乱の為ゆゑ破壞せしを秀譽法印勸進の功を募り寛永
十年癸酉影堂を再興をとのゆゑハ
書る牌あり二位尼
平政子の牌ありしゆゑ
の銘ゆゑ詳なる

（其文左のごとし）

梁牌銘曰

二位尼者北條四郎時政卿息女則右大將家
賴家實朝兩公為慈母經二十
嘉祿元乙酉年七月十三日卒法名如實世人
号尼公是也井七谷卿依為尼公分領有
將軍乘蓮寺雖然度々為兵乱破滅
今秀譽法印勸
■乘蓮寺他力令建立者也
■奉造立鎌倉二位尼御影堂一宇國土安全求願成
就

国立国会図書館　タイトル『江戸名所図会 7巻』 請求記号 839-57
ガラス使用

寛永十癸酉年三月十一日

東鑑脱漏曰　嘉禄元年乙酉七月十日庚午丑刻
二位家薨御六十九歳是前右大将軍之後室二代
将軍妙儀也前漢之呂后同而令執行天下給若又
神功皇后令再生令擁護我國皇基給歟云云
十二日辛未霽寅刻二位家御事有披露出家男女
済之云云

大檀那閑宮産次郎忠次
別當　衆蓮寺　秀誉

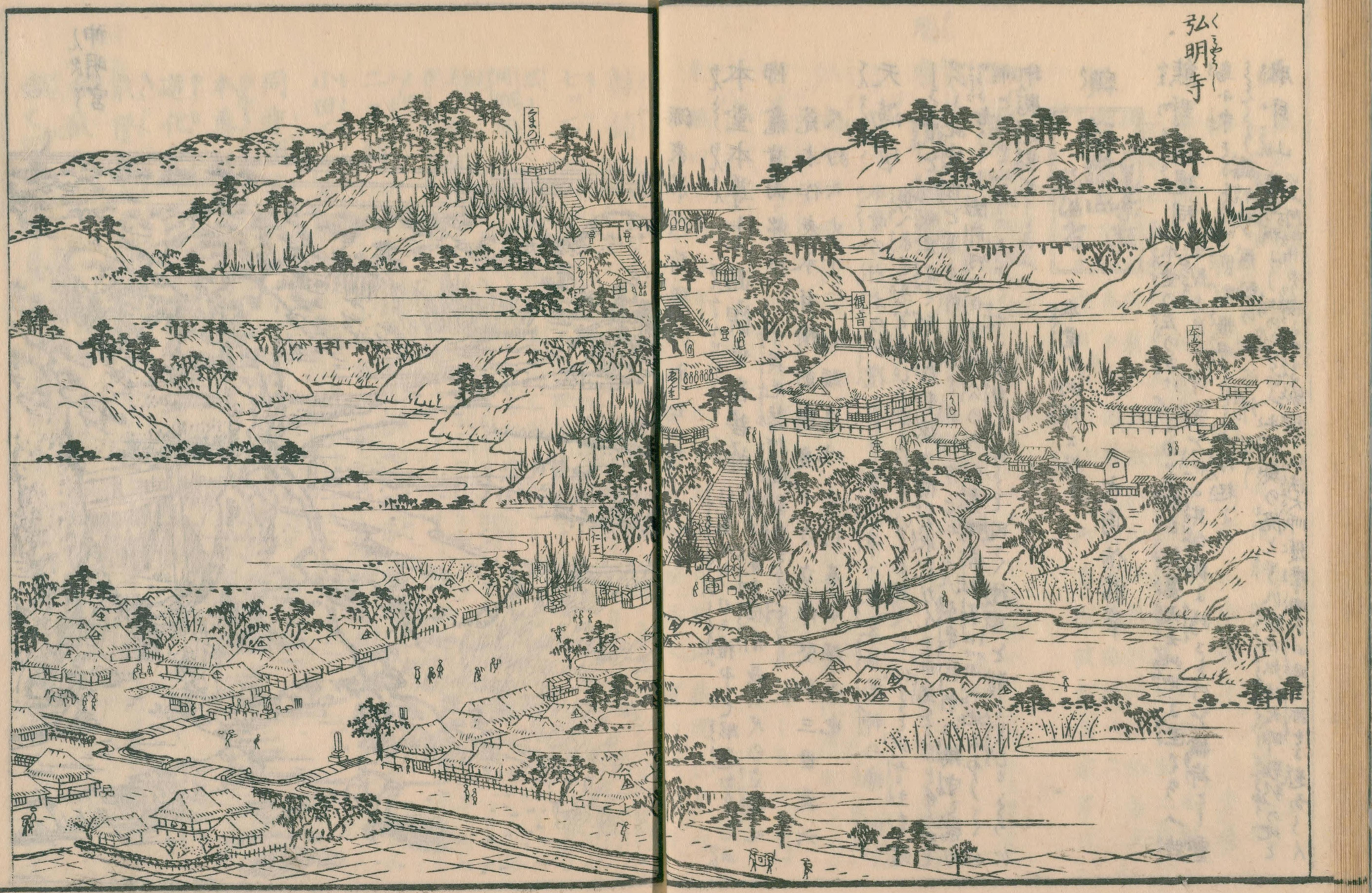
瑞應山弘明寺　金澤通道より十四丁半右の方へ入る弘明寺村にあり　坂東順礼札所の第十四番目なり當寺も弘法大師開創の佛刹ゆゑ中興を光慧阿闍梨と号す古義真言宗石川室生寺末に属せり毎年七月十日十二月十八日市立ち大に賑ふ

東鑑曰治承五年正月廿三日於武蔵國長尾寺并求明寺等者以僧長栄可致沙汰之旨被定下是

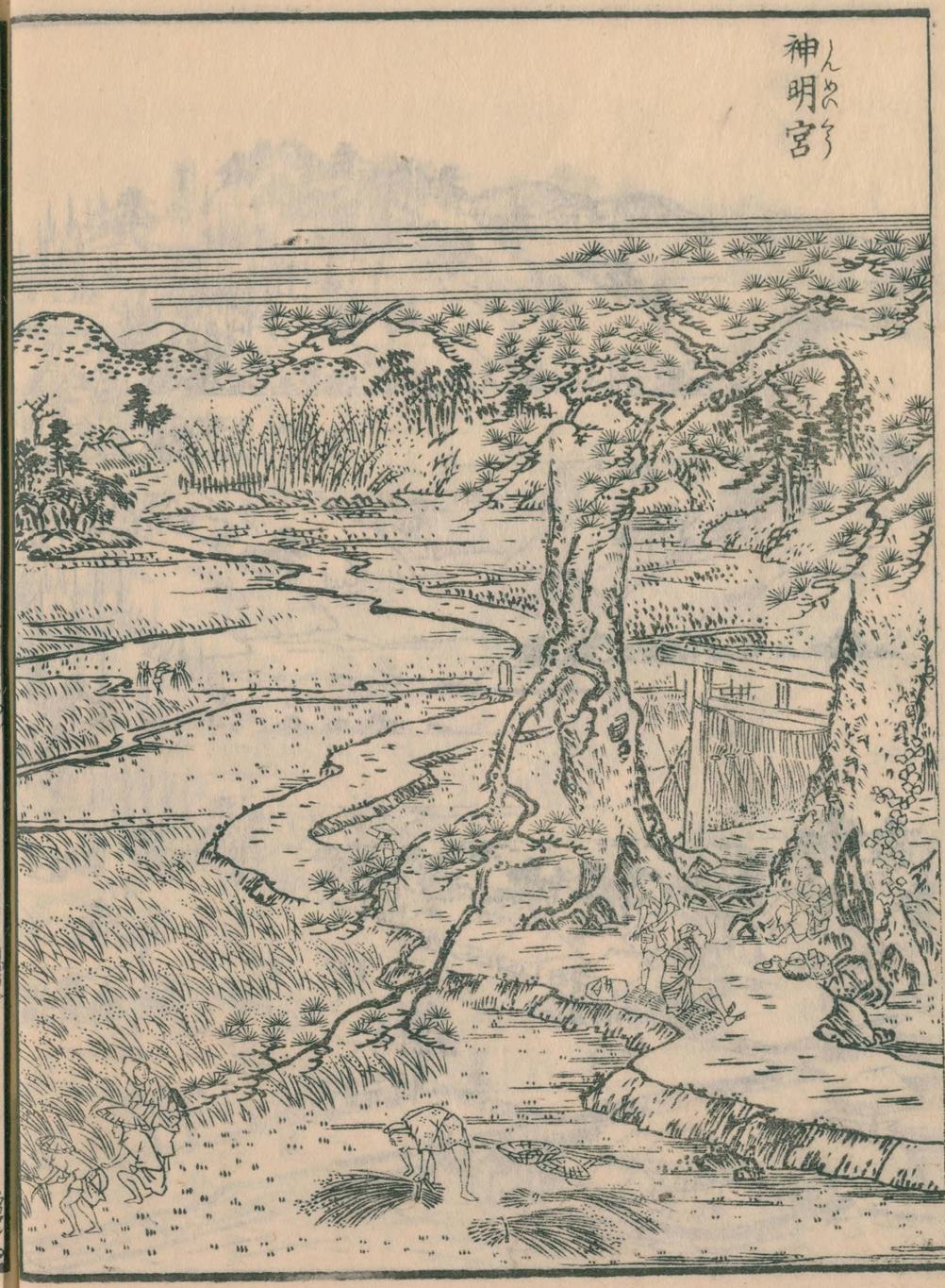
源家累代祈願所也云云

本堂本尊十一面觀世音菩薩　行基大士一刀三禮ゆゑ彫造ありと云
佛龕背面銘曰　荒木作表本有横削横彫長六尺約六丈十一面顕果地各行基示深旨也
中與光慧阿闍梨注之

天満宮　本堂の内右の厨櫃の上に菅神の像一軀を置　昔浪華の秋客某菅神の像を欲しと祈誓し夢中に神告ありて曰我有縁の地へ来れり是を售べしと云寺主喜躍して買人を招き入れ其價を求むるに秋客笑ひて云く我價を望まず只此神像を我國へ将行て其方の門葉相續若氏某の鎮守と崇めば神慮を因く神恩を謝しまつらんと云ふ寺主是を聞



国立国会図書館　タイトル『江戸名所図会 7巻』 請求記号 839-57
ガラス使用



神明宮

鯨鐘　堂前右の方坡の上より旧鐘ハ弘安九年九月廿五日鑄治のことのやて願主法印長慶と云名を注せり今の鐘ハ寛政十年より改鑄せり

七ッ石　神変奇異の霊石ゆゑ自ら現れ自ら没る人恒よ其在所を知ざる時ハ図らずよく此石現ずと云若堂舎破壊を及ひ修理のかを以材木金銭等を募んとする時ハ図らずよく輻湊す然ハ材木金銭等涌るかことくあり

同郷檀家の庭中　寺僧喜悦明和三年造営の功を以て此霊石の徳を報ん為ニ境内より安土桃山の頃の物と覚しき地蔵尊数体を掘出し当寺境内の一隅に安置し香花を供へ尊像ハ二ッあり又最戸村より其餘の所在ハ未詳

往来不日ニ工面の資財を集ふ　此石今二王門の傍ニ存し当寺表門の前耕田の中ニも一ッあり共ニ四ッハ今猶現然たり

二王門　石階の下ニあり金剛密迹の両像ハ運慶の作なり　各九尺餘その木像ハ後ニ額ニ瑞應山と筆しるせり

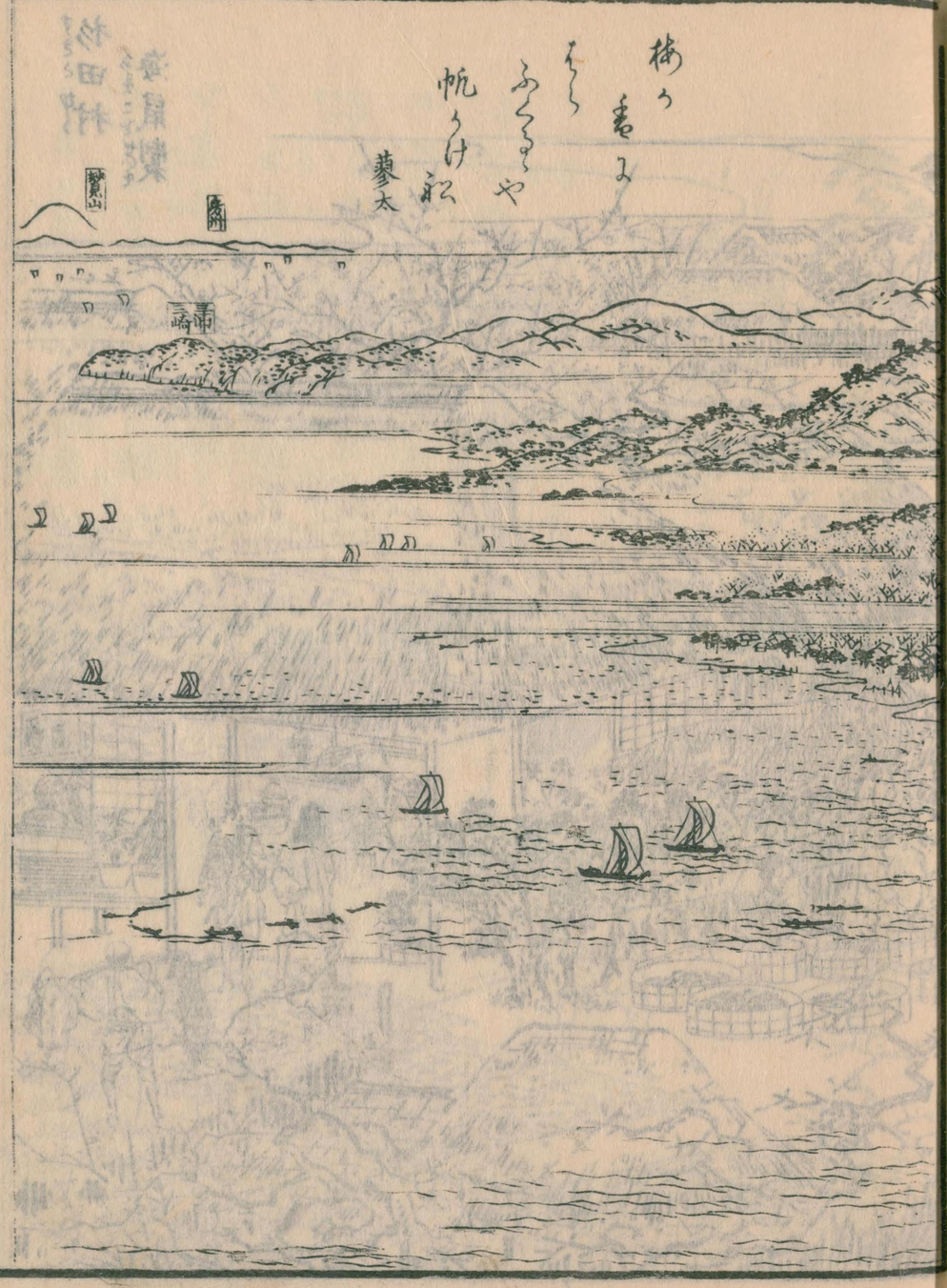
小田原北条家制札　永禄十年丁卯十月二日

同寺領寄附證文　天文二年癸巳二月十八日　石巻勘解由左衛門尉　石巻彦六郎

本尊縁起曰人皇四十五代　聖武天皇の御宇行基大士東國遊化の頃此地ニ至りまふ空中ニ白蓮乱飛しく山上より散隆す大士怪ミて山ニ登りまふに果しく神人ありて一ツの白狐ニ乗し一ツ霊鳥ニ乗せ今境内ハ鎮座の熊野稲荷等の両神現なり各大士ニ告て曰く去る養老年間印度の善無畏三蔵遠く我

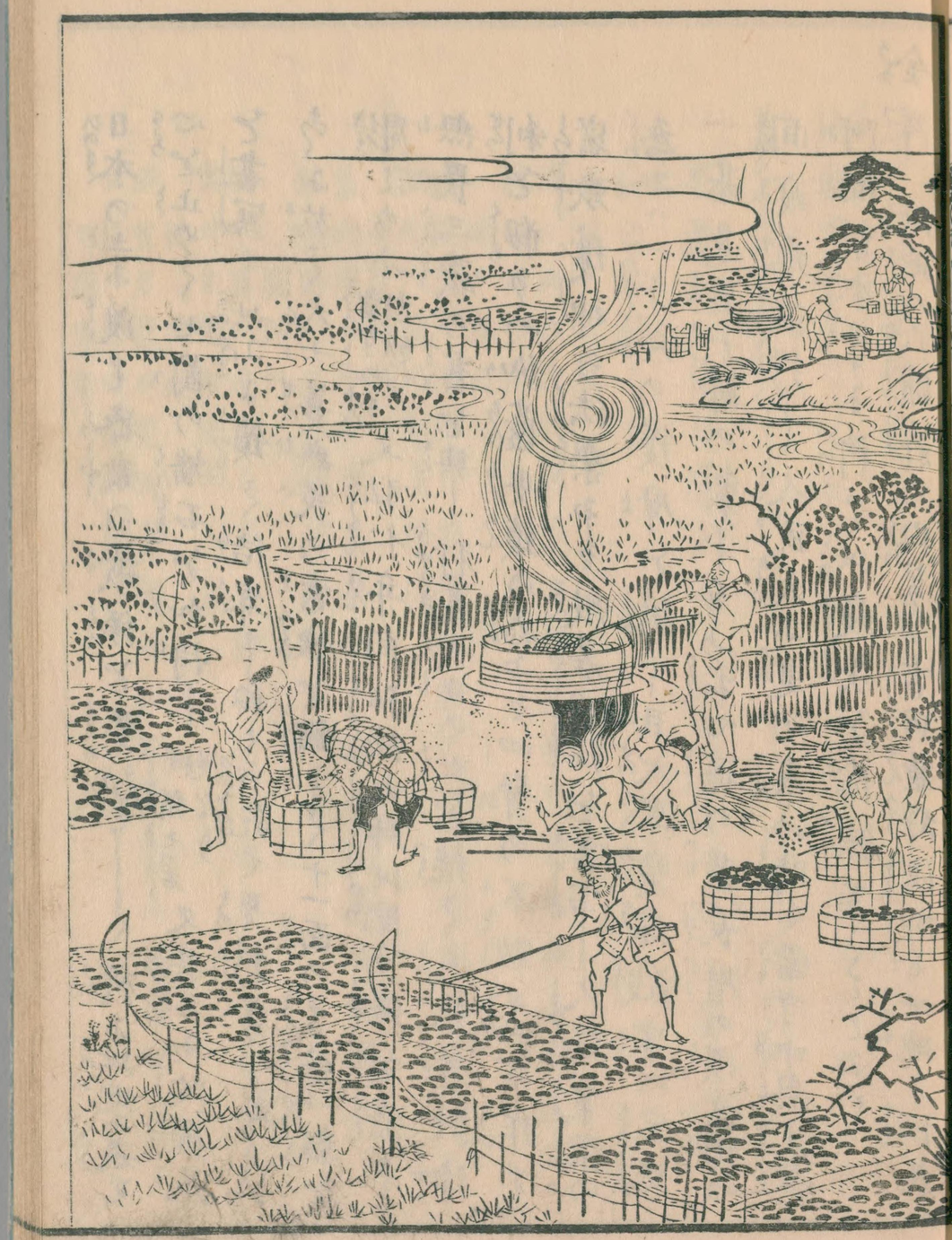
国立国会図書館　タイトル『江戸名所図会 7巻』 請求記号 839-57
ガラス使用

杉田村
梅園



国立国会図書館　タイトル『江戸名所図会 7巻』 請求記号 839-57
ガラス使用

杉田村海鼠製



国立国会図書館　タイトル『江戸名所図会 7巻』 請求記号 839-57

ガラス使用

日本の土ホ渡る密教の機縁を要むとして終ホ此地ホ来る
心を止めて七箇の蟠石を加持し（柵七ツ石是なり）又其石ホ陀羅尼
を書写し此山ヨ鎮く結界しぬと云て乎ホ方を礼ふ
ふ於て大士善無畏の素懐を鑑て十一面の像一軀を
彫刻す（当寺の本尊）又弘仁年間弘法大師此地ヨ錫を飛し
無畏三蔵の舊趾を興し行基大士の跡を継く大悲者ホ浄
刹を翻ヨ伽藍安鎮の功ゆ作ヨ密教護神の法楽ゆ般若心経を書写し一人法繁栄の
為ホ一千座の護摩を修し且大黒愛染乙字の宝塔
一基是皆大師の製しヨ遺の後長暦の頃武相の
間疫癘流行し人民大ホ是を患ム時ホ当寺中興光慧
阿闍梨本尊ホ祈リ此疫災を除滅せんと云く
此地ハ六浦荘の内なり吉田兼好法師も此地ヨ住れ
金澤

しより家集ヨ入れり竟恵法師の北國紀行ホも神異
絶妙の勝地なりと称せられ
景を摸し盡ムを及ひ筆を投し嘆賞を大明
心越禅師ハ其佳景西湖ヨ似ると
詠の詩賦あり

洲崎晴嵐　浴々驟浪斂餘暉　滾々狂波遠竹扉　市後日斜人
静瀬戸秋月　悄行雲流水自依依　往古巨勢金岡此地の勝
清瀬消々不繫舟　風傳虚籟出林幽　一声欸乃誰家集
飄雪小泉夜雨　有氷輪島際浮　処共看　凄涼夢亦驚　甘泉洞々聽分明　蓬窓淹蹇無
暮雨捐　識腸断君山鐵笛聲　帰帆遠天無恙軽帆掛日遶款乃高歌落
朝雲　宗萬汎連　外依稀數艇到洲前　名晩鐘聲未歇　音幽明聞者感
風生　悟一片落雁迷　昔名藍成覚地華鐘晩扣若鯨
平瀉　離祇樹木

能見堂
擲筆松

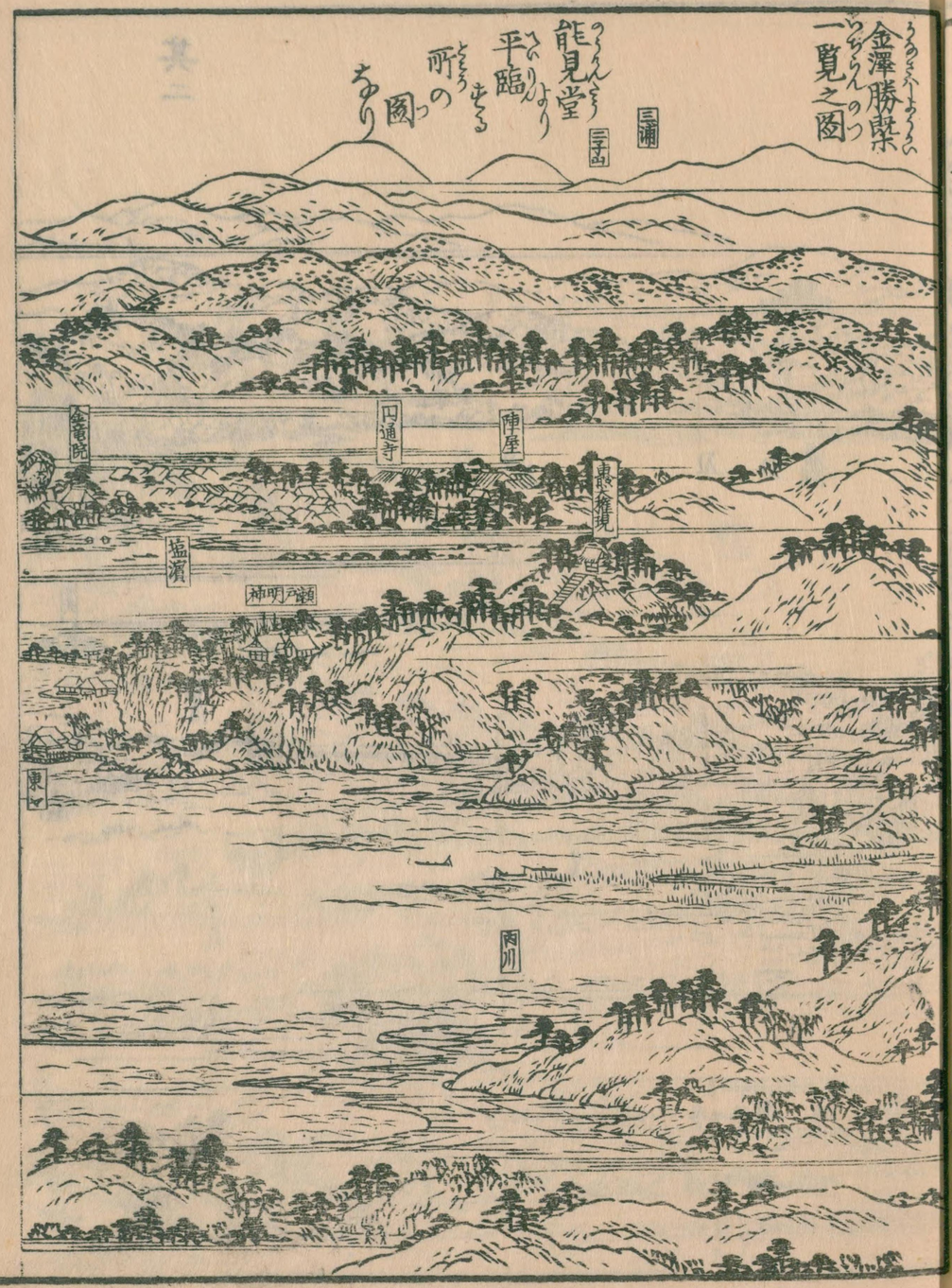
此所より
金澤の勝
景を平臨
する図ハ次ニ
挙ぐ

涼しさや
折ふしと
ハ
筆
擲
松

西山
宗因

国立国会図書館　タイトル『江戸名所図会 7巻』 請求記号 839-57

ガラス使用



能見堂　金澤摂名寺の艮の山上よりひらく
本尊の地蔵并ハ恵心僧都の作やと云
後世立像二尺五寸計の地蔵菩薩を作るなり霊像をハ
其胎中よりこめくりとし云故よ此草庵を地蔵院と号く扨の堂宇ハ
近世久世和州侯源廣之建立ありくとそ擲筆山及ひ
能見堂ハ二ッの額も共ハ心越禅師の書なり　脊畫工
巨勢金岡なくとの其真景を写さんとそ筆比及ハさる歟

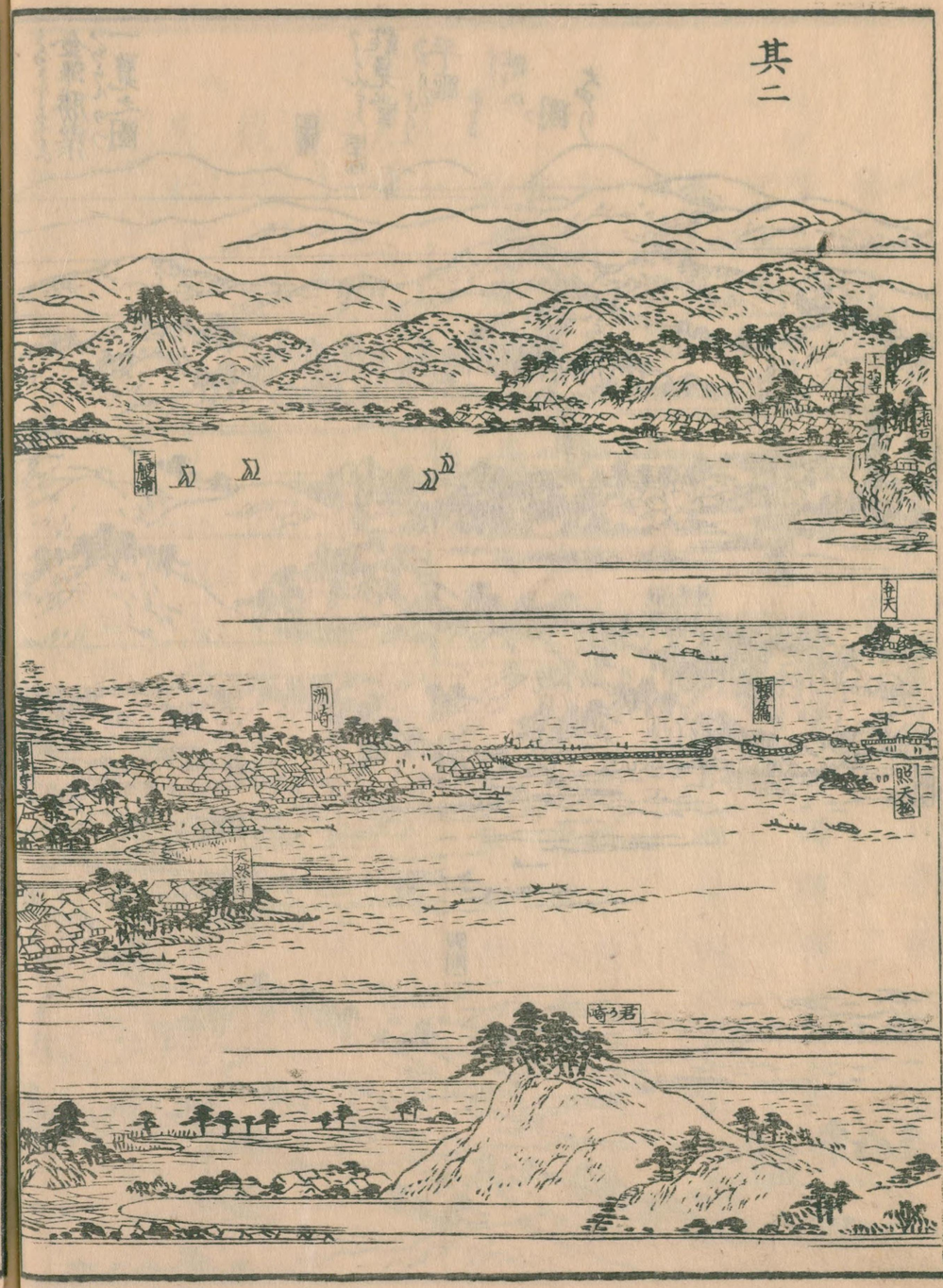
列陣冲冥堪入塞荻蘆蕭瑟幾成隊飛鳴宿食倦
捷進千里傳書誰不愛　内川暮雪

廣陌長堤竟沒潜奇祀六出以鋪縑渾然王砌山
河色遍覆充峯露些火　野島夕照

獨羨漁翁是作家持竿盪槳日西斜綱得魚來沽
酒披簑高臥仕堪誇

武州金澤鄉筆山能見堂有溝掛八景之風味因観
鎌倉志甚詳一夕寥々對青燈漫賦八景之陋句以
識斯境云歳執徐夏日　東皐越杜多艸

国立国会図書館　タイトル『江戸名所図会 7巻』 請求記号 839-57
ガラス使用



国立国会図書館　タイトル『江戸名所図会 7巻』 請求記号 839-57

ガラス使用

以絶倒ふのつけん堂と云ふ堂より作る或人云此地より望めハ瀬戸の八勝まて皆能見る故よ能見道と云といふ

梅花無盡藏　出金澤七八里許攀最高頂則山々水々面々之佳致昔畫師金岡此地の勝景筆を投しよりと此号ありとぞ名無基但其名不甚佳相傳曰濃見堂也中畧又云畫師絶倒擲秋毫

萬里居士

登々甸囘路攀高　景集大成恐卻勞
秀水奇山雲不裏　畫師絶倒擲秋毫

西山宗因

淨瑠璃於ふ笑ハと筆捨松　牧乃吟　仝

此地よ至ふく金澤の勝景を望めハ盡ハぬく南より西

北よめぐりくハ皆山ゆゑく東ハ滄溟よ連ゑ千里の風光
窮りなく沖行舟の真帆片帆ハ雲ゐ入ろとあやぼる
瀬戸の神祠ハ水よ臨ゑ称名の仏閣ハ山ゐ傍ろり漁家
民屋ハ樹間ゝゝゑかゑゑし島嶼ハ波間ゝゝにあろ
いる又鹽戸の烟潮水の盈虚も皆此擲筆松の下よ平臨
せゑゑゆゝく一瞬よ遮ゑ一日早晩の異なる一年春夏
秋冬の変まる千態万状極りなく開左の一勝地ゆゝく
あろゑも松島象潟の風致あろを以雅客遊人留連時を
移せをゆゝとも其十ろ一を究ゑる能ハず

金澤山稱名寺　町屋村よあり弥勒院と号に真言律にゝく
南都の西大寺よ属を當寺ハ亀山帝の勅願所ゆゑ
北条越後守平實時の本願其子顕時の建立なり（實時を稱名寺と
小田原北条家分限帳よ金澤稱名寺領金澤よ伏せゑあり又氏綱の三男
勸壽王所領の内よ金澤稱名寺分とあろ）又法名を正慧とい此地よ居住せゑ
愛染堂　堂とあゝく此堂よ一切経を収蔵ゑ（顕時より金澤を家号とを顕時
大結界の図よ三重塔と注しゝゑ道與撰后の回國雑記よ称名寺と
律院とゝことの外なる古寺ゆゑ鎌倉志よ弥勒
仆ゝゑ又三重の塔婆よありてゝゑ又澤庵和尚の鎌倉記行ゆも本堂一宇あり諸堂皆跡を
塔も一重よゑりゆゑとあろも
まゑ此塔の
本堂の東よあり
其銘ゆ云く

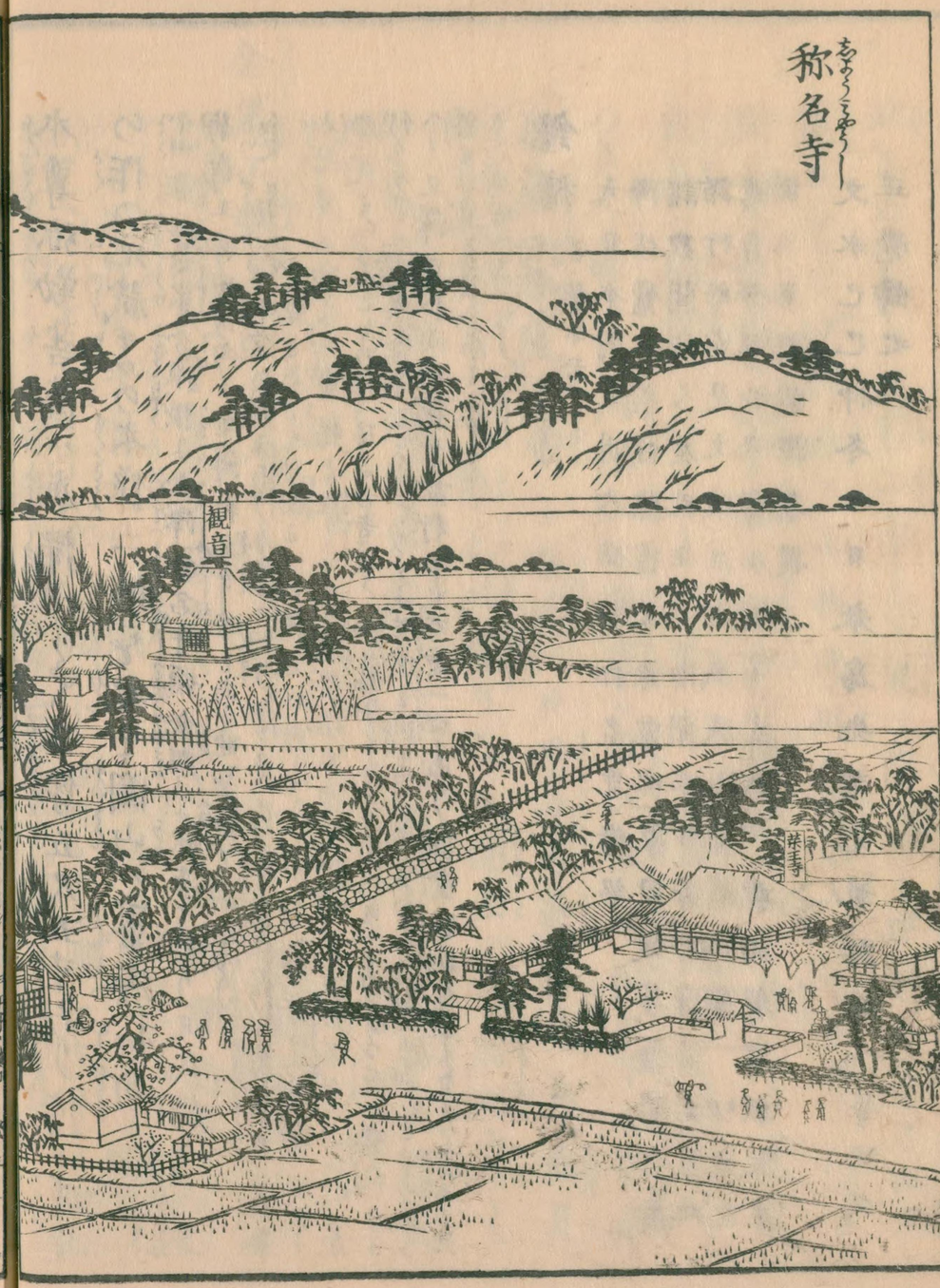
鐘樓

大日本國武州六浦莊稱名寺鐘銘
降伏魔力怨除結盡無餘露地擊捷槌菩薩聞當集
諸欲聞法人度流生九海聞此妙響音盡當雲集此
諸行無常是生滅法生滅已寂滅爲樂一切衆生
悉有佛性如来常住無有衰易一聽鐘聲當願衆生
斷三界苦頓證菩提

文永己巳仲冬七日奉爲先考先妣結緣人等同成
正覺鑄之

本尊弥勒菩薩ハ唐佛ゆゑく立像五尺五寸あり傍ゆ運慶
の作の地蔵ゑの木像二軀を安ゑ開山ハ審海和尚と号す

国立国会図書館　タイトル『江戸名所図会 7巻』 請求記号 839-57
ガラス使用



称名寺

国立国会図書館　タイトル『江戸名所図会 7巻』 請求記号 839-57
ガラス使用

国立国会図書館　タイトル『江戸名所図会 7巻』 請求記号 839-57
ガラス使用

大檀那越後守平朝臣實時　實泰　亀ヶ谷禪尼

入宋沙弥圓種述

宋小比丘慈洪書

改鑄鐘銘并序

此鐘成乎文永更捨赤金重營青鑄者也遥十地並位力并募士女超越三有同德於寶應聲逍一種餘響銘曰

伏乞先考超越三有同德於寶應聲逍一種餘響銘曰

於光世音聖乎四生九類與千周典称于笠篇

洪鐘之起其始卿焉載之觸處聞々入玄

質備九乳形象圓天聲之驚夢明眠

三界五趣八禪四定離長夜聽者

之朝之夕無愚無賢凡厥聽着同見金仙

正安辛丑仲秋九日

大檀那入道正五位下行前越後守平朝臣顕時

法名慧日當寺住持沙門審海行事比丘源阿大工

大和権守物部國光山城権守同依光

金澤顕時墓　當寺大檀那阿弥陀院後の山の中腹にあり

高さ七尺餘の五輪の石塔なり

同貞顕墓　同所にあり顕時の子なり　五輪の石塔ハ前ニ同シ程ナリ

国立国会図書館　タイトル『江戸名所図会 7巻』 請求記号 839-57
ガラス使用

美女石 姥石 池中橋より西にあり 金澤
あをきの 四石と称す 其一 舊樹は枯る 今弱木を栽う
青葉楓樹 本光院の前 鐘樓の像より 諸曲あり 是を俗に
金澤八木と称するもの 一つなり 俗のまうで

北國記行 金澤

つゆふかく 一本ぬれて 色のみそめ
落梧桐の

東國記行 覺恵

さきそめし 一本ぬれて 色のみそめ
秋の夜の 梧桐の

東國記行 宗牧

さきそめし 一本ぬれて 色のみそめ
秋の夜の 梧桐の

鎌倉記行 仝

池のわたり 一本のかへでありしが
いつのころにか 一本のかへでありしが
世ふるままの 秋の夜の 梧桐の

西湖梅 澤庵

同 鐘樓の形 よりて 梵
種類 しく 花は重辨 潔白なり
其一 未の

梅花無盡藏 貼西湖梅詩序 丙午小春 余相州金澤 梅以未開也 萬里居士

梅花無盡藏曰 貼西湖梅詩序 丙午小春 余相州金澤 梅以未開也 萬里居士
為遺恨冨士 則本邦之山 而斯梅則支那之名產 觀乎
唯哉金澤 見其花 豈非東遊第一之奇觀 乎
梅名稱律寺 落蕾而 主屬南 舶移杭州西湖 朝金之閣
古招提遊 盖先代 呼之余 作詩指枝面 丁寧未飯
澤梅遺恨 翠禽啼 雖好背 支西湖 臙梅有 識之農
春摘其 奉花數 十及十 年遲 以一 片為 餘一 恨未
舊廬 獻彼 今 包見 惠焉 福山 有湖 墅盡
之條貼 并以出 於春翁 之則 於春包 澤化 所設
其花 近而 見之 酌夏 余五 余手 赭措 令昌枝
貼 作贅 語題 軸新 造意 漫掛 揚水 堂之 一日 招余 趙濃

六浦称法日荷上人
称名寺の住僧と
戯ゝ碁を圍ミ彼
寺の二王尊を
賭物とせ
上人勝つ
れハ終ゝ
これを負て
甲州身延
山へ至られ
つゝしと云
大力無双の人
なり

前朝金澤古招提
梅有西湖指枝拜
遊十年遲雖噬臍
未開遺恨鞏禽啼

一横枝上粘西湖
意外春風眞假合
名字斯花別不呼
傍人定道昼成圖

櫻梅 同所 ○花ハ重辨なり ○八木の一員なり
普賢象
文珠櫻 同所 ○普賢象ゝ對しくの一種なり
称名寺 ○今ハ荒廃せり ○澤庵和尚の鎌倉紀行ニ共ゝ八木の一なりと
そめりの房ゝもゝえ
声のとゝもに坐禪觀法の床を
頃も荒ゝさゝ

阿弥陀院 称名寺 ○本堂より左山の傍よ
運慶の作 ○此二像ハ扨田村東禪寺
旧の二王 ○ハ六浦の荒井平次郎光結
称名寺の住侶と碁を圍ミ二王を賭
二王の像を ○ぬく身延山ゝ迁
なりと称ふる五寸ほりの玉を
六浦上行寺ゟ其二王の像の玉眼

二王門 ○樓門の左右ゟ安置する所の金剛密迹の像を
當寺

熊野新宮 ○池の西岡の上ゝあり
寺寶 ○當寺の鎮守
佛舍利 ○祖相承の
國室生山ゟ納置ゝ
亀山帝の勅
弘法大師大和
と号しく代ゝ

国立国会図書館　タイトル『江戸名所図会 7巻』 請求記号 839-57
ガラス使用

當寺へ移し納めらるゝ昔ハ弥勒佛泥塑像長三寸座像にして
勅封ありしと云ふ
愛染明王金銅像 亀山帝の作 古備前の作なり
共ニ菅丞相の真跡の瑜伽論ハ長二寸五分一行ハ二十五字あり此論ハ一部百巻
紀州高野の金剛三昧院ニ一巻江州竹生島ニ一巻以上合せて八巻ハ今尚存
枚挙すべからず其餘の二巻ハ所在なし
鎌倉志よりも其外古佛多く

大界外相圖

元亨三年癸亥二月廿四日 元亨三年當寺結界の図 其光景尤大廈高堂ニ
古の繁昌しのばるゝ今ニ異なり其裏書の校ニ云

答法 鵜摩師極樂寺長老 恐公大德
唱相 多宝寺長老 俊海律師
湛睿

當寺本願越後守實時及ひ顯時貞時貞将等の画像の
懸幅あり

楊貴妃玉簾一連

梅花無盡藏曰 初尾州熱田よりありしを 亀山帝の勅ありて當寺ニ
遺恨矣珠簾猫兒支竺群書之目錄無介者而不能 金澤称名寺間西湖梅以来開爲
融目云 注曰称名寺水晶簾唐猫見之孫一大時撿攴郡書 叔の細き竿と色絲もて硝子の細き竿を

盖先代財寶
又曰寺祕件々之物容易元使人看之也

田園雜記

簾の長さ三尺四寸 道與
惟后

北條陸奥守制札

金澤阿弥陀堂称名寺領數地并垣場等事
右於當所軍勢并甲乙人等不可致濫妨狼藉若於
令違犯輩者為被處罪科之状注申交名状依仰
執達如件

康安二年五月廿四日

陸奥守

永享十一年称名寺領結解状

註進

稱名寺領赤岩十四ヶ村御年貢錢永寛十結解状事

合八十貫文内

六十九貫六百文　寺納

八貫文　代官給

一貫文　徳妙衣料

八百文　夫領路錢 両度四人分 年貢運上時

三百文　今津問方酒直

三百文　六浦六郎方礼儀晉錢之時

已上八十貫文

右所勘定状如件

永享十一年三月三日　政所憲意判

當寺ハ北条家繁昌の昔魏々たる巨藍なりしかども物換り星移り堂宇多く破壊して今ハ山園を古木賃そく松杉

金澤文庫

印面大サ
共如圖

梢をあつそひ常ハ鬱々たり房宇ハそうそく寂寞の扉を閉ち座禪觀法の床をもめくるに似たり

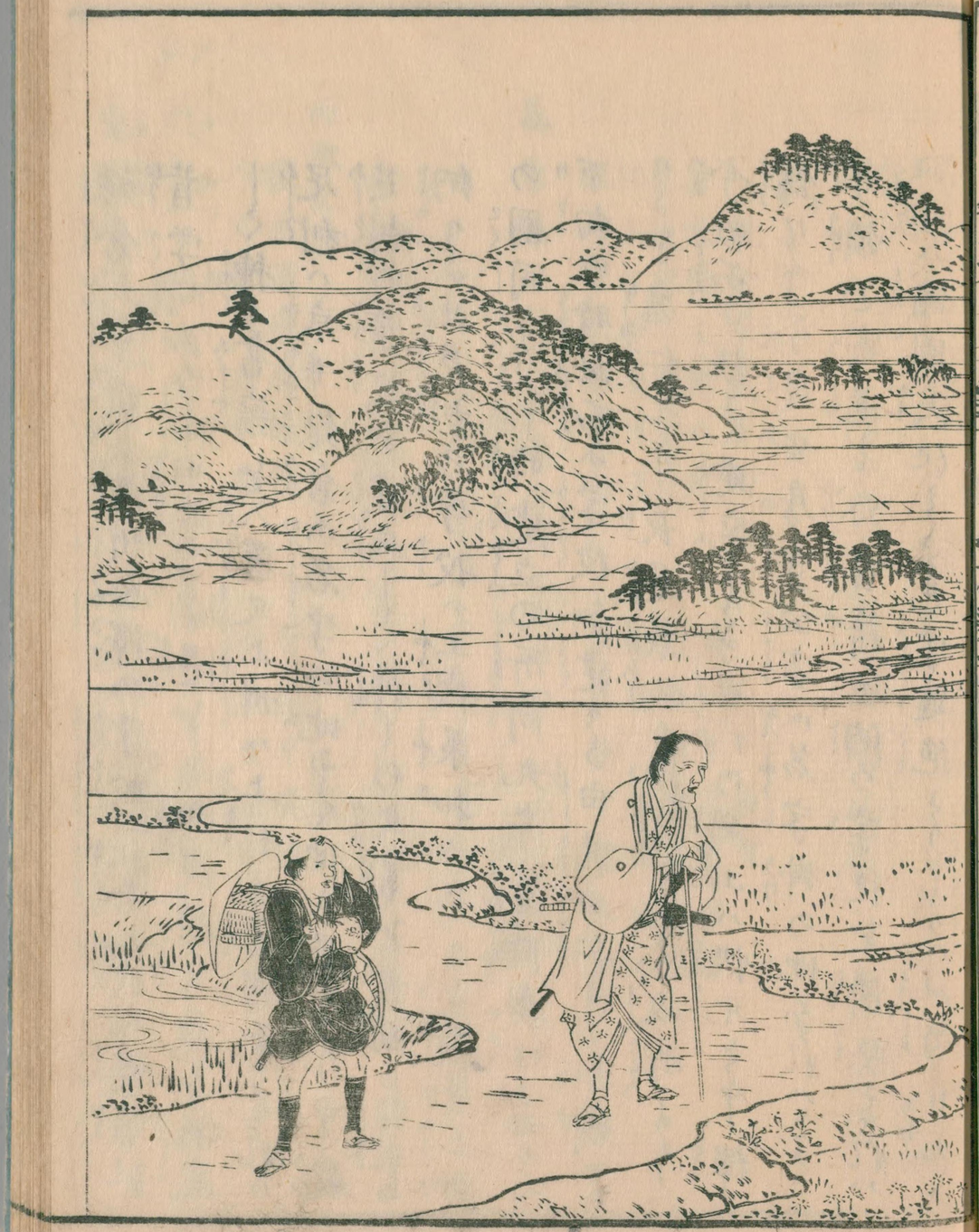
金澤文庫舊址　阿弥陀院の後の島を以て東野文集ハ寺前の土庫の称ありと相傳北條越後守平顯時営建せる和漢の羣書を納め儒書ハ墨印佛書ハ朱印を用ひ印文ハ楷字ゆゝく竪ハ金澤文庫の四字を注す

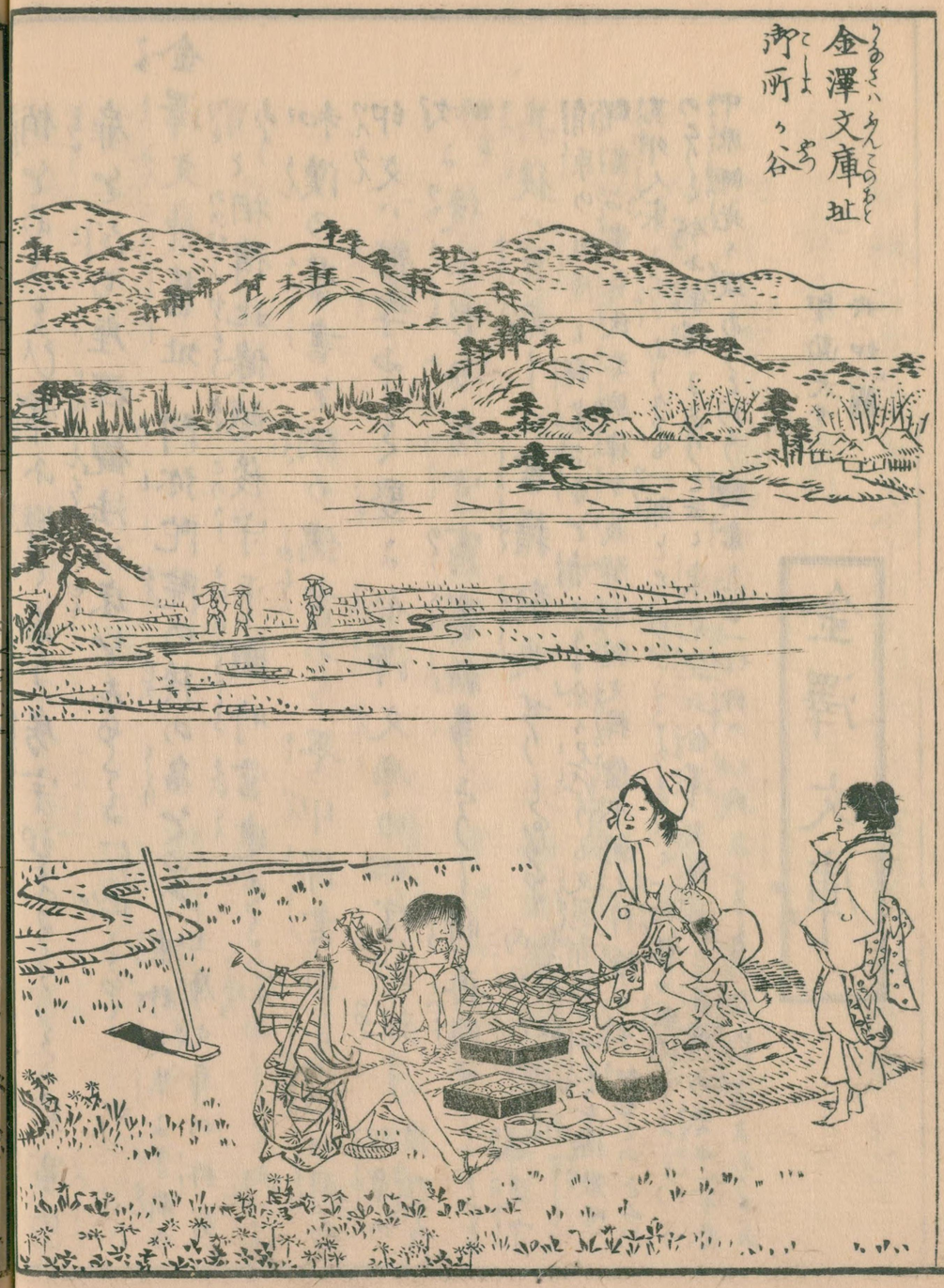
次ハ後上杉安房守憲實執事の時再興せしと其後ハ荒廢して書籍散失せりとなり

丙辰紀行ニハ越後守平頼顯此所ニ文選清原の師光ノ左傳敎隆ノ群書治要春氏要術律令義解本朝文粹續本朝文粹續日本紀等のこゝに清原の敎隆ハ群書治要を續せる余ハ其外人家よりも一部とそのひろうつしもありと云ふ今ハ金澤文庫内ハ左傳の巻本三十巻のこりくまれしも一切経も取ほこしてこうつし中原師光ノ跋ありとて東見記云金澤文庫内ハ一切経の外殘りくまの弥勒堂よありと云ふ鎌倉志ハ一切経の

金澤文庫

国立国会図書館　タイトル『江戸名所図会 7巻』 請求記号 839-57
ガラス使用





国立国会図書館　タイトル『江戸名所図会 7巻』 請求記号 839-57

ガラス使用

鎌倉大草紙云武州金澤の学校ハ北条九代の繁昌ゟ
昔学問あり〳〵旧跡なり是をゟ今度彼文庫を再建
〳〵く種〳〵書籍を入置又上州ハ上杉ゟ分國ありそれハ
足利ハ京并鎌倉ゟ名字の地ゟ他ゟ異なりゟ彼
足利の学校を建立〳〵く種〳〵の文書を異國ゟり求め
納る此足利の学校ハ上代兼和六年ゟ小野篁上野
の國司〳〵〳〵時建立の所同九年篁陸奥守ゟりて
下向の時此ゟ学校を建る由其旧跡ゟ今残る
るを應仁元年長尾景久ゟ沙汰〳〵く改所ゟり
今のゟ移〳〵く建立〳〵る近代の開山ハ快元ゟ禅
僧なり今度安房守公方ゟ名字掛の地ゟれハ〳〵く
学領を寄進〳〵弥書籍を納め学徒を憐愍せされハ
此頃ハ諸國大に〳〵〳〵学道絶〳〵〳〵ハ此所日本
一所の学校とゟる是ゟり猶以〳〵く上杉安房守憲実を
諸國の人をほめゟろハゟ〳〵西國北國ゟりも学徒悉く
集ると云〳〵

観金澤蔵書而作

玉帳修文講武餘　遺人来見奮蔵書
犀軺映日窺蝌斗　縹帙衆晴走蠹魚
圯上一編看不足　鄭侯三万欲何如
照心古教君家有　收在胸中壓五車

慕景集

二月将菜金澤の文庫
日向る勝元の行ゟり
ゟ〳〵ハ物〳〵ともゟれ
ゟ〳〵く遺〳〵る

持資

丙辰記行

懐古涙痕霑旅情　羅山子
亡書泯幾田歲　府儒早晩起蒼生
境致空留金澤名

徒ゟ所う〳〵谷　阿弥陀院の後の切通ハ則御泰詣の道なり〳〵と
亀山帝の行宮の跡なりと

国立国会図書館　タイトル『江戸名所図会 7巻』 請求記号 839-57
ガラス使用

此帝勝地佳境へ遊歴のこゝちあり此地へ御幸のふ
るき跡とも
詳ならず
魚好法師閑居旧跡　其地今未考
魚好家集　武蔵国宝寿寺の下に昔住しあれども
あれはてゝ
ふるき跡

古郷の汚界を尋ぬるの記

魚好

薬王寺　三療山と号し称名寺の前道より左側にあり古義の
真言宗なり　龍華寺に属せり本尊大日如来
座像三尺弁あり　当寺は蒲御曹司範頼卿乃
霊牌あり　表に大寧寺道悟裏に天文九年庚子六月
十三日と記したる由鎌倉志に出る
よし

薬師堂　本堂の前右の方にあり　廊を
本堂の薬師佛の像脇士十二神将の
像と共に行基大士の作なり　深く龕
厨に秘安しありふる人の
説に当寺旧は薬師寺と号せしを
室町大寧寺と改むとあるその頃此
寺を大寧寺と改めしなるべし

天然寺　法爾山と号す　同所薬王寺
より九丁あまりも隔
てゝ瀬戸街道より野島へ移道の左側にあり　浄土宗
にして鎌倉の光明寺に属せり本尊
座像一尺五寸計あり作者未
詳　永禄二年二月　寺宝よ弘法大師及び恵心僧都
禅方和尚と号す　二十六日は寂せし
等の画ける佛像四五幅あり

龍華寺　知足山弥勒院と号す　天然寺より五六町南の方瀬戸
街道洲崎村と町屋村の間道より左側にあり古義の
真言宗の檀林なり　御室仁和寺の末
本尊大日如来ハ座像二尺餘り右よ弥勒佛の木像を安
す共よ作者を志るさず　左よ安置の不動尊行基大士の
作なり　立像二尺弁　太田道灌入道寄附せし云開山を法印

町屋村

龍華寺

国立国会図書館　タイトル『江戸名所図会 7巻』 請求記号 839-57

ガラス使用

融辨と号
鐘樓堂前左の方にあり
其文左のごとし

大日本國武州六浦庄金澤鄉
唱鐘知識文

夫滄海者麟甲所潛泰岳者翔蹄所集則知智池者
愈塵所浴靈鐘者苦類所息然則洪鐘隆鼓焉非但
留毘王之望劒兼亦驅灰河脫三界苦得見菩提
菩薩勝慧者乃至盡生死恒作衆生利
而不趣涅槃而度悉加持
諸法及諸有一切皆清淨有頂及惡趣悉調伏盡諸有
令得淨除故不爲垢所染諸慈性亦然
知蓮體本來大欲得清淨
不衆利群生能作堅固利
畀自在随求陀羅尼光明眞言
三七尊聽陀羅尼
各梵字略之

天文十年辛丑五月五日

當寺住法印擢大僧都善融
擅那古尾谷中務少輔平重長
法名道傳

寺寶両界曼荼羅二幅涅槃像一幅共よ唐畫ゆゑ八祖畫
像一幅弘法大師或ハ頼行筆者詳ならず
の筆ともゝ云傳ふ十三佛補像一幅弘法大師の筆なりと云傳ふ
一幅弘法大師の筆なりと云傳ふ裱補の裏書よ大田道灌奇進とある寺僧云く
天正年間御當家よ於て重修なり
五指量愛染明王像弘法大師の作と云傳ふ
鳳凰頭一箇龍頭一箇共よ運慶の作なり
當寺ハ治承年間鎌倉右府頼朝公伊豆國三島明神を
金澤瀬戸の地ゟ勸請ありしゟ後法味を進まつる為
文覺上人と共よ志を合せ文治年間六連の山中よ精舎を
創建せしゟ弥勒菩薩の像を安置ありしゟ都卒の四十九院よ
準擬し四方よ六八の僧坊を建淨願寺と号庄園若干
を寄らる當寺堤なり往古弘法大師擅學修行の地にて俗ゟ弘法山と云又境内よ靈泉
然しゟり慶堂
甍を並へ粉壁ハ月の光を移せ伽藍ハ博敞ふしく丹柱そ
星の林をなせり乎後正嘉年間南都の恩性律師當山ゟ

国立国会図書館　タイトル『江戸名所図会 7巻』 請求記号 839-57
ガラス使用

住し戒律を弘め弘長二年ゆを東寺の能禅法印當寺に於て灌頂を修行せる印融僧都の附属ゆ依て光徳寺を兼帯せる此寺も頼朝公の建立にして真言の霊區なり無量光院印融東遊の初此寺よ住親筆の書籍充満然よ數度の兵乱よりして両院の領地も他よ奪ゆ大に荒廃せるを明應八年融辨師大永四年甲申八月深く是を愁へ本尊の冥助を頼れしゆ菅原朝臣中務丞資方力を合せ伽藍再興を企むる時ゆ本尊弥勒大士夢中辨師に告るく是より艮よ當る末世有縁の勝區あり彼所ゟ移し三密の法燈を挑へしと夢覚るの後千乎を窺ふに竜燈の奇瑞あり洲崎村の境なる松あり竜燈の松と号今ハ拙堂補ゟ數圍の竟よ辨師本尊の霊尓よ任せ此地よ至ゟ二町四方よ結界し兼帯ゆ和の浄願寺光徳寺両院の僧坊を合せて一寺とせし後土御門院の勅を奉ゟて知足山龍華寺と号師資相傳の本ゟ聖教を納めて善融法印よ附属せ此師ハ相州小田原の城主大森氏の末子ゆして龍王丸と号く弁師の徳行を慕ひ浄願寺よ入て僧世よ隠れなし依て北条左京太夫永楽銭七貫文并柴村權現堂山を寄附せ享禄五年ゆ東寺の寶菩提院亮恵僧正を請して傳法灌頂を受天文十二年古尾谷中務少輔平重長を檀越ゟて洪鐘を改鋳せ後太田道灌不動尊の霊像を寄附して武運延長を祈ゟ霊牌を置来世の追福を求らる天正十九年御開國の後當寺を御営ひらく御朱印を下しものひしより四海泰平ゟ祈念怠ゟざるなり

當寺ハ真言古義檀林一宗の本寺ゆして金澤ゆ甲ゟ境内ゆを古水脊え覚樹の粧ひを示し緑竹翠の色をなして實相不変の容を顕も海水左右よ湛て朝烏夕兎の影を浮へ人家前後よ列ゟ山市漁村の観をなせり二十

国立国会図書館　タイトル『江戸名所図会 7巻』 請求記号 839-57　　ガラス使用

浦の郷

鎌倉記行

浮萍和尚

国立国会図書館　タイトル『江戸名所図会 7巻』 請求記号 839-57

ガラス使用

有餘の末寺ハ林邑よ散在して年々の法會月々の勤修恒例よ任せて怠るなく寶祚の長久武運の萬歳を祈るまゐる曉の振鈴の声ハ無明煩惱の眠を覚し夕ベ梵鐘のひゞきも三途の迷夢を破る實よ江南の一精舎なり

善應寺　野島山と号く同所より半道斗も塩濱を隔て南の方野島よ傍てあり真言古義の寺にて龍華寺よ屬せ本尊不動明王の像も作者をあらバ云觀音の木像ハ立像二尺斗あり聖徳太子の作なり愛染明王ハ座像一尺五寸斗なり弘法大師の作と云此像の胎中よ愛染そるの小像千體を作て籠らるゝ事ありて

野島　同所東の出崎ゟ瀬戸搦へハ三町間七八町あり土人百軒島とも云民家百軒より餘る時ハ必災あるゝ故ふ百軒島と呼へりとぞ此所の出崎よ紀州亜相頼宣卿の鹽風呂の舊地ありとぞ

小祠あり又中腹ゟも菅神の宮あり此地の少し北を平方と

いひ町屋村の東を金澤原とゝよ此地の東北海濱を乙鞆の浦と称せり

鎌倉記行　岩のあるゝ所ゟ汀をゆくなれバ

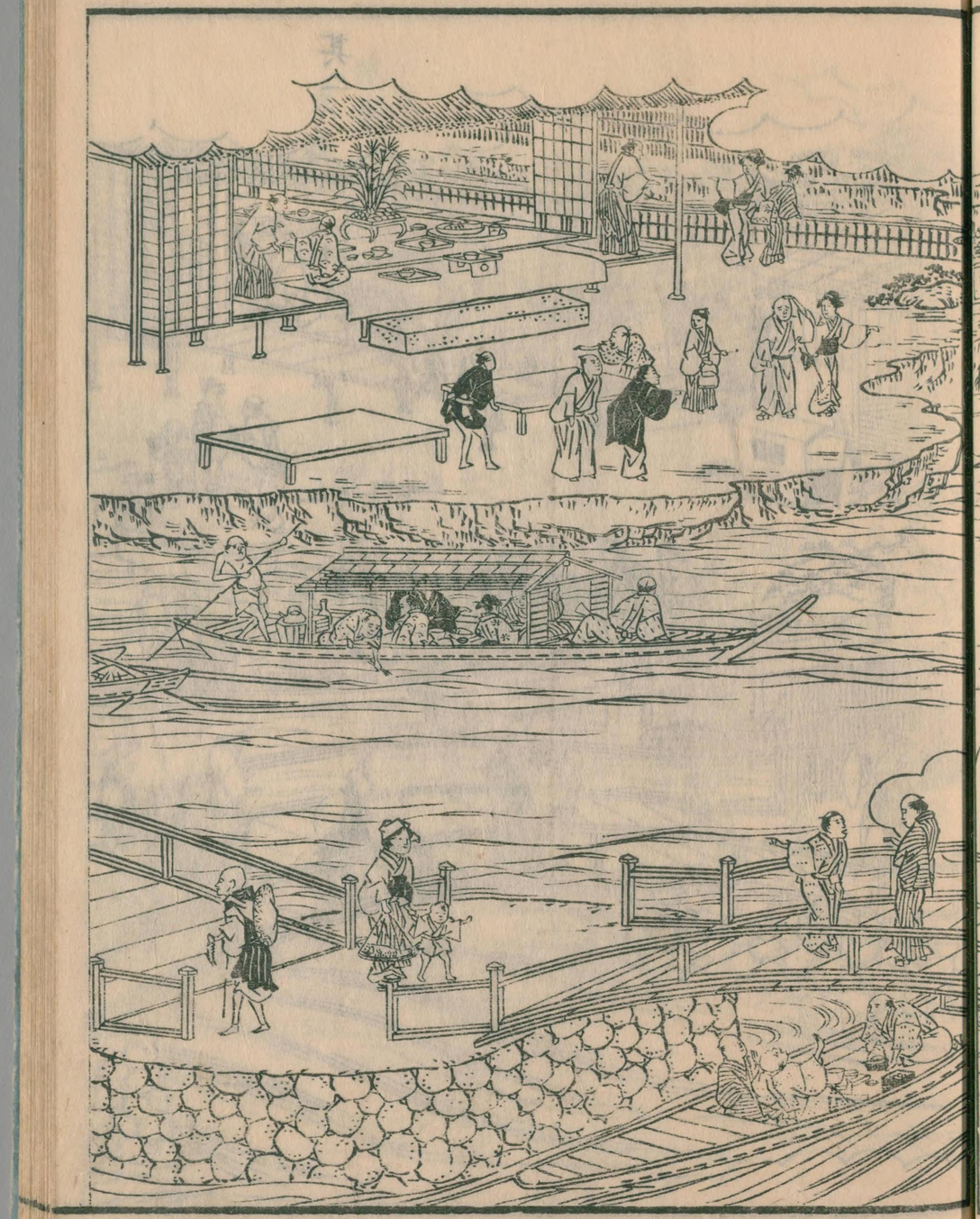
ゟの秋を忘ひわせくあられなり北ゟの野島渡し　野島ゟ南の方室木村へ入渡しあり舟路一町餘あり江戸ゟ浦賀への近道なり

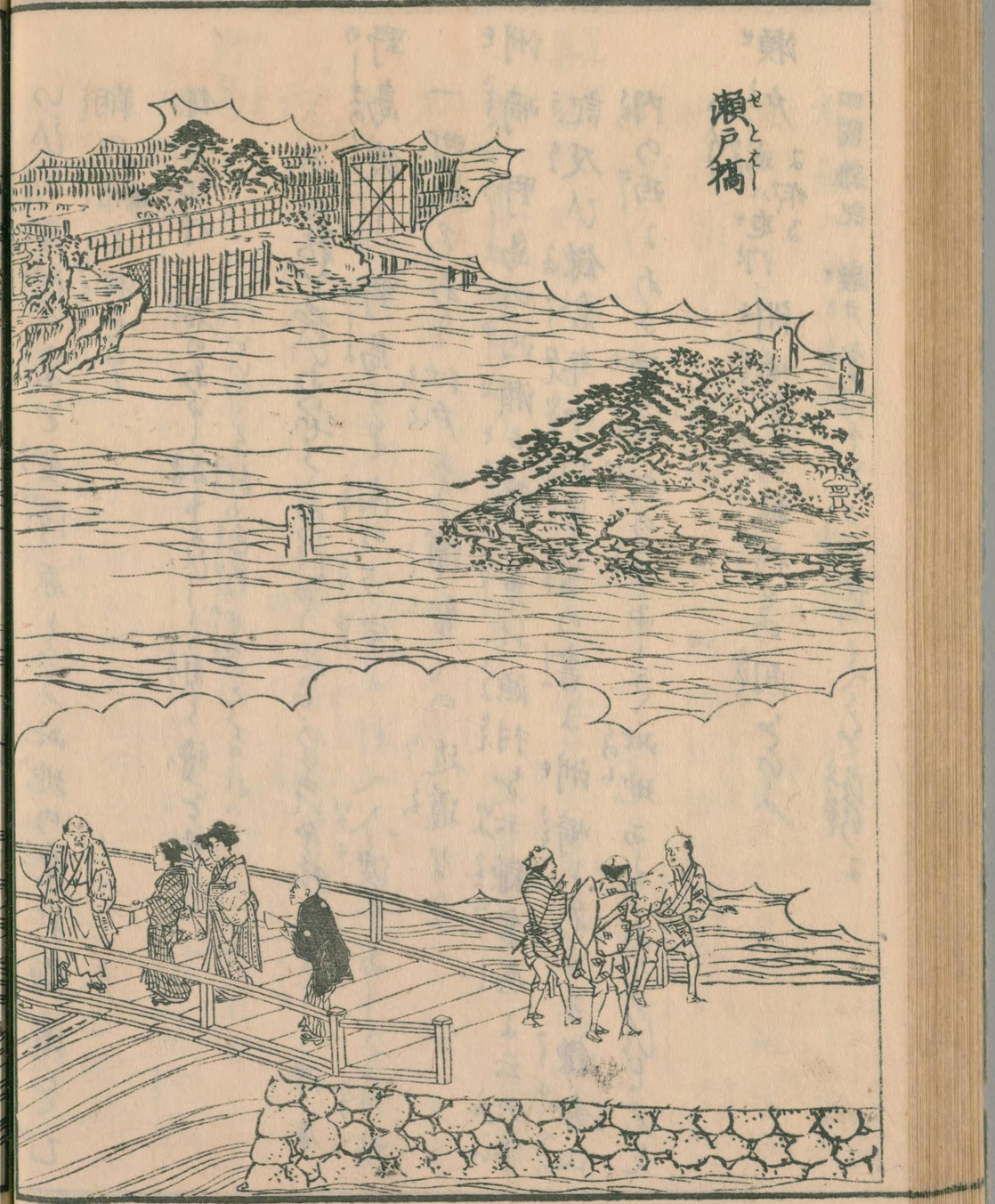
洲崎　野島の西瀬戸搦の東北漁村を云鎌倉志よ云太平記及ひ鎌倉年中行事ゟの書よ内の西よある洲崎村のゟ中ゟ此地あるゝ

瀬戸　或ハ迫門よ作る

洲崎と引越村との間をゆく

四國雑記　瀬戸金澤とゝよ後地のゟゝ





国立国会図書館　タイトル『江戸名所図会 7巻』 請求記号 839-57

ガラス使用

旅亭
東屋

其二

国立国会図書館　タイトル『江戸名所図会 7巻』 請求記号 839-57

ガラス使用

瀬戸の沖より流れ来りて此所の汐合激浪を
なす事なれども漁舟は此浪を乗切て漕出
猟船も此浪を乗切て入来る事なれバ
瀬戸橋　同し入江より架せる中間より臺を儲け橋杭を用ひず
長さ二間あまり九橋二ヶ所を渡せり　道興准后
追門の明神より入海よさし入めれバ遥に遠き山の奥まで湖水
潮さし入めれバ遥に遠き山の奥まで湖水
古木黒く朽て橋の下より
朝夕の景氣も朝夕よそり金岡も筆
鐮倉
照天姫松　同所北の方西の出崎よりあり延寶庚申の大風ゟ
吹おらるゝより迚一株の松の根株のみを存せり里俗
云く照天姫姥のみ燻られしと云く焼ゝ焼さしの松ゝと
いふとぞ
鎌倉大草紙云　應永三十年癸卯春ひより常陸國住人
小栗孫五郎平満重と云者あり
背きされハ源持氏結城の城へ勅座ありく同八月
二日より小栗を攻らる終ゟ小栗忍ひく三州へ落行
とある条下ゟ云今度小栗忍ひく三州へ落行其子
小次郎ゟ忍ひく関東ゟ相州権現堂
と云所へ移りくを其邊の強盗を集りくを迚に宿
かりくれハ主の中ハ此浪人を常州有徳仁の福者の由
聞く定く随身の寶あるくしと打殺しくく取んと由
終合せ乍去健なる家人共あり仍せんと云一人社
盗賊ゟ酒ゟ毒を入呑せ殺せとのみ先と同し宿ゟ
遊女共を集今様ゟ唄ハせ踊舞戯れくる彼小栗我
馳走の躰ゟそゝめくる夜酌ゟ立くる
照姫と云遊女此間小栗ゟ逢馴此ありくるを少し

瀬戸明神社（せとみょうじん）

法身妙應本無方
三島不阻一封疆
山色海波顯無跡
朝陽出海是和光
沢庵

国立国会図書館　タイトル『江戸名所図会 7巻』 請求記号 839-57
ガラス使用

あや自も此酒を呑もらくありるう小栗をあられまあれ
曲を私言くる間小栗も呑様ふとてふし酒を更よ呑さう
くる家人共をあつらへ何まも酔伏てそう小栗ハ仮初よりる
躰ゆく林の有る間へ出くれハ林の内ふ鹿毛なる
馬を繋くく置くり此馬ハ盗人共海道中へ出大名往
来の馬を盗ミ来くれとも外一のあく馬あく人をも馬
をも喰踏くれハ盗人共不叶しく林の内よ繋置くる
小栗是をよくく密ふ立帰り財宝少く取持て彼馬ふ
乗鞭をもめ給ふくる小栗ハ無双の馬乗ゆ庁時の
間よ藤澤の道場へ飛行上人を頼くれハ上人あくれと
侍衆二人付く三州へ送らる彼毒酒を呑くる家人并
遊女少く酔伏くるを川水へ流し沈め財宝をを尋取
小栗ををるくれともなくる盗人共ハ夜ふ分散を
砂ふ立くる照姫ハ酔くる躰
酒を呑さうくれハ水ふ流れ行川下よりオい上もたをう
くる其後永享の頃小栗三州より来もく彼遊女を尋
出し種くの宝を与へ盗人共を尋皆誅罰しくり其後ハ
三州よ代く居住をつへり

鎌倉大草紙ふ曰照天姫ハ照姫の事を云歟小栗の名を世よ
為氏と称せれとも同書小次郎とのみあり
武小栗系譜を按ふ孫五郎平満重子子助重とあり大草紙よ
今世よ云伝ふる五ハ俗伝ふ異なりとも猶ふ附会の説を備ふくし

瀬戸明神社　瀬戸橋より一町許西の方道より右側よあり
祭神大山祇命一座ふ神主千葉氏奉祀も社傳ふ云
當社ハ右大将頼朝公治承四年四月八日豆州三島の御神を
勧請なしまつるより鎌倉年中行事ふも四月八日瀬戸
三島大明神臨時の祭礼とあり或云往古此神此地へ飛

来る　土人傳へ云今金亀院の庭中飛石と
按ずるに頼朝卿鎌倉へ入給ふの比ならん
七年四月八豆州の配所北條の舘より司の
俗不審也　小田原北条家の分限帳は六浦社領
六浦より神主拘とあり　安房の作と云今本社幣殿の
看督長像　内陣に拘る　額　近世里人粧飾を加へしより依て古色を
失ふ

正一位大山積神宮

世尊寺従二位経尹卿筆

同額裏書曰
延慶四年辛亥四月廿六日戊辰書之
沙弥寂尹

鳥居額　瀬戸明神　神道長正二位卜部季兼卿筆

鐘樓　社前右の方にあり　銘文左のごとし

瀬戸三島社鐘銘
洪鐘新製寄器海塲霊神振徳衆人結縁韻徹遠近
鎌體黄玄緇素益大村里聽鮮開静動閲奏敬悲田
縣化世俗頻敲夜禪覚煩惑夢驚生死眠昏暁清響

勧々永傳
大戒善提薩埵僧普川筆　普川國岬公鎌倉宝戒寺の第二世
應安七年四月十五日奉鑄之　神主
檀那沙弥釋阿善　義道
勧進聖
大工　大和権守國盛

薬師堂

本社の右にあり　土人按ずるに放下僧薬師と称せし
放下僧八下野國住人牧野左衛門何某の子なり　兄弟の輩
父左衛門上州伊香保の湯より帰路相模國の住人刀祢彌正信俊と
口論し信俊より討れし此瀬戸の三島明神の社前にて放下僧
放下僧と号る謡曲あり　其他の書よろしからず

三本杉　薬師堂のあり　根株相連りて三本あり　土人
延宝庚申の大風より吹折られ今ハなし
本社の右の傍にあり　是も延宝八年庚申八月六日の暴風より吹倒され
蛇混拍　今地上より横たはり其樹長大なり　竜蛇の起伏するが
如し　金澤八木と称するもの其一なり

梅花無盡藏曰　文明丙午十有八年小春二十有七己亥盤桓瀬戸六浦之濱遺廟之前掲昔時諸所作之詩杉邊傍点劃不眠如新鐫之云云

同書曰
瀬戸社

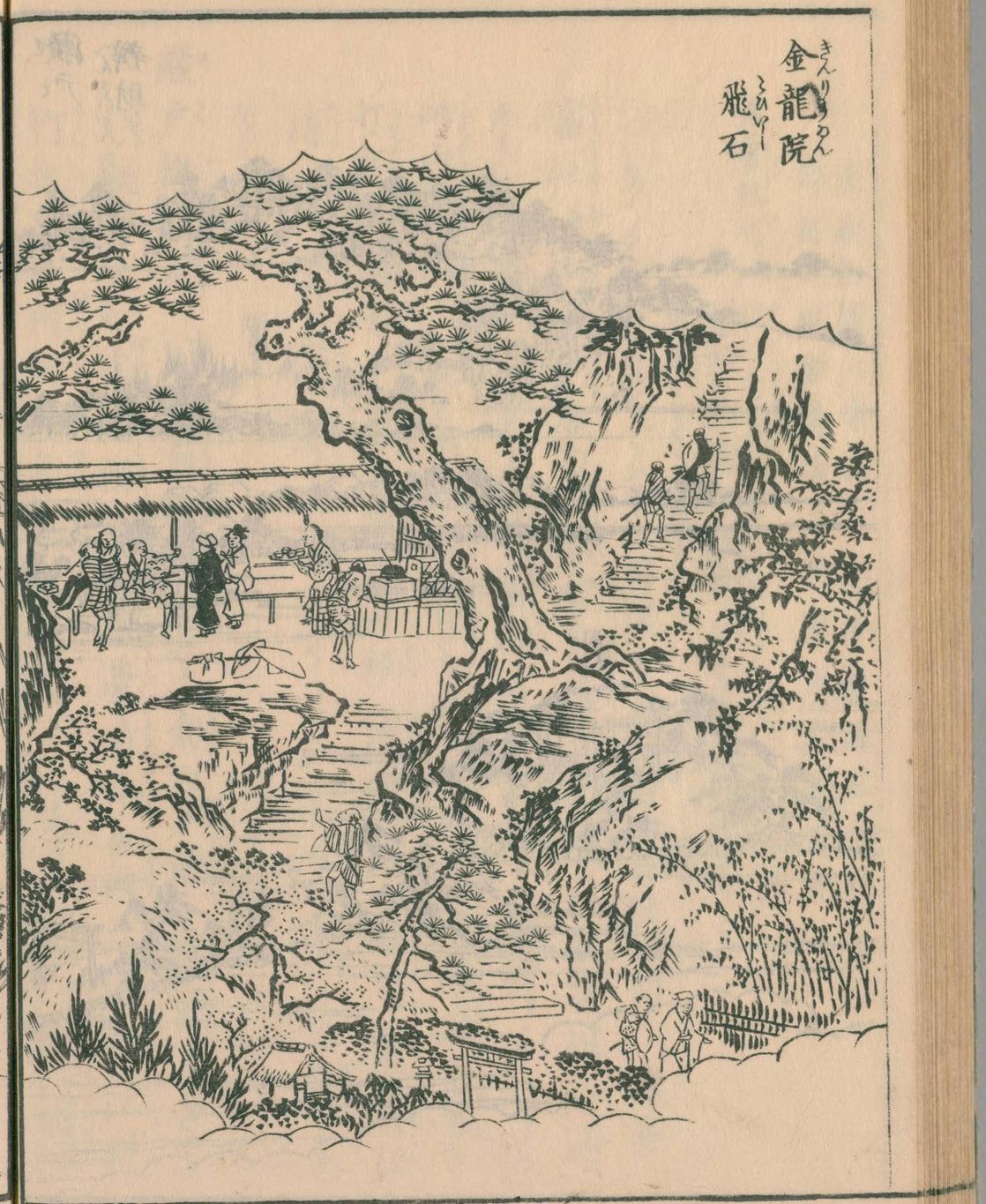
自注云六浦廟前有古柏屈蟠

遺廟拍圍六浦搗　朗吟繋馬石支腰
歸鴉飛破翠屏面　剰被風聲添晩潮

鎌倉紀行

まゝそれより雪ふみわけ神社の内　浮巻
當社境内を千歳の古木雪を洗き面岩社頭をはゝみ
そゝる山の勢ひ実に巨霊神のなを延くの川くまりろ
此山を遷ーんとあゆむ社前の老樹浦風ふ靡き
打寄る浪を下枝を洗ふ一根清浄なる時ハ六根共に
清く我人の頭ゟ神もゆるさるゝとそ

瀬戸弁財天　同社前道を隔て南の入海へ築出しーゝる
小島ありて昔頼朝卿の御臺所平の政子御前江州
竹生島の御神を勧請せられるとあり　島の中泥拍を多く植ゑ



金龍院（きんりゅういん）
飛石（とびいし）

国立国会図書館　タイトル『江戸名所図会 7巻』 請求記号 839-57
ガラス使用

形甚奇なり　同橋の下に福石と唱ふるものあり　金澤四石と称し土人の諺に此石の前を拾ひぬくものは必有福の分とあると云傳ふ

鎌倉紀行

海風もわきぬ大浪をされ

神の社のあふ島をつく弁才天　洋菴

弁一才二の柱あり島のめぐり

ら浪ちる松をあらし

圓通寺　日輪山と號し同所二町半許西の方道より右ゝ

あり昔法相宗ゆゝく南都法隆寺ゟ屬せり今ハ天台宗に

改ゆゝく江戸の東叡山ゟ屬せり元三大師を安置せり

開山ハ法慧法印と号久世大和戸源廣之寺領を附

せゝく

東照大権現宮　山の上ゟ鎮座なり郡ノ宮

昇天山金龍院　同所西南の方四町餘を隔て同一道の左

側の海岸よあり世俗飛石山とも呼へり禅宗にしゝく

鎌倉の建長寺ゟ屬せり本尊正観音座像二尺三寸行基

大士の作なり　鎌倉志ゟ虚空蔵菩薩を方崖元圭和尚を以て

開山とゝ　和尚ハ僉約翁の法嗣なり永徳三年九月十六日ゟ寂す

飛石　當寺後園の山の裾よあり巌の間ゟ昔瀬戸の三島明神豆州ゟ此石上ゟ飛移りしと云

巌あゝくされと近頃の地震よ

震ゑゝくし平地よおちたる由

九覧亭跡　同山の上よあり曲折して登るいくばくの人の儲ゝくし一亭の

詳ゝくを山西の眺望も又多景なり寺僧云此地の

八景ゟ能見堂を加へゝく見るこゝろゆゝく名つけゝくしと

泥牛庵　金龍院の前路を隔て向側よあり禅宗ゆゝく

鎌倉圓覚寺ゟ屬す本尊ハ七寸計の唐佛の十一面観音の

像を安ゝくし此庵の開祖ハ圓覚寺の傳宗庵南山和尚諱ハ士雲

聖一國師の嗣法なり建武三年中興ハ習甫玄道座原と号ゝし

十月七日寂崇寿寺の開山なり

縣懸中の人　當庵の南一町斗山の上ゟ古墳二基あり其一ハ海老名

長門守といゝる人の墓ゆゝくし此人泥牛庵ゆゝく自害し

国立国会図書館　タイトル『江戸名所図会 7巻』 請求記号 839-57
ガラス使用

終ると云傳るのみにて時世事實とのふ精しからす
猶考へし　按ふに海老名源三季貞の後裔なるへし
荒井妙法日荷上人加持水　同所農家金子氏の地より存する
井を云その味甘美のみにて尤靈泉とのふ此所の小地名を
荒井と称せるを往古日荷上人荒井平次郎光吉と号
しより此地ふ居住せしかるとかくの呼来るとなり（日上人の事跡ハ
次の上那寺の条下ふ詳なり）
能仁寺舊跡（今の米倉矣の陣屋の地上杉憲方明月院道合の建立なりしとぞ此寺ハ昔
鎌倉志古記曰　上杉房州太守築武州金澤能仁寺
創七宇伽藍靖方崖和尚為開山第一世蹄山曰福
壽蹄寺曰能仁太守有旨隆能仁寺位列諸山者也
永徳三年小春日東暉曇昕謹記又本尊建立永徳
二年三月七日始之同年四月廿一日終住持東暉
曇昕奉行徳慧徳澤檀那巨喜上總州法眼朝榮作
之大檀那房州道合徳珠書之

能仁寺佛殿梁牌銘（鑑倉建長寺の龍峯庵
にあり文左のごとし）
恭願皇圖鞏固而四海昇平黎庶安寧而五穀豊稔
檀那前房州太守菩薩戒弟子道合敬白在伏冀佛
運帝運歷永劫而綿延寺門檀門經萬年以昌盛耆
永徳二年壬戌四月日開山方崖元圭謹題右

六浦山上行寺　泥牛庵より六七町西南の方道より右側に
あり當寺往古ハ真言の古刹ゆへ
然るふ應安年中ふ住持某日蓮の法を
北徳中山の日祐上人開祖とし自ら妙法日荷上人と号
祖師堂　宗祖日蓮大士の像を安
日祐上人ハ千葉宗胤の孫貞胤の子
北徳中山の妙法華経寺の第三祖なり
日法上人三十三歳の年日常上人の指図ようつくり彫造るとのふり

祖師木像胎中収蔵法華經書寫人名簿（紙ハ巻用のぬのこの
三寸三分ほどの表紙へ細字ふ書つくるものあて表紙もなく巻つくるまゝを紙
包紫銅の経筒ふ入つくり胎中ふ収む経筒ハ明和年間の製のものあり法華経

国立国会図書館　タイトル『江戸名所図会 7巻』 請求記号 839-57
ガラス使用

六浦上行寺

国立国会図書館　タイトル『江戸名所図会 7巻』 請求記号 839-57

ガラス使用

八巻ハ書写の人名簿一巻共ハ九巻あり其文ニ云く

御身の御経奉書写之人々

一巻　圓融律師　日源　安立坊の開山
二巻　良範坊　日秀
三巻　正圓坊　日傳
四巻　祐眞坊　日正
五巻　良範坊　日秀
六巻　理賢阿闍梨寧阿　日尚
七巻　理賢阿闍梨寧阿　日宣
八巻　右願主　卿公沙門　日理
奉造立　妙光慈妃
妙法親父

奉讀誦妙法蓮華経五部

良範上総公
正圓府同心久贊

奉讀誦妙法蓮華経五部
方便品　壽量品　普賢呪　十如是　自我偈
各十偏宛讀誦之

陀羅尼品

奉讀誦
十如是　自我偈　題目百廿反
奉唱題目一萬反　日源敬白
御身ノ形相中尭日法上人御作也

應永十三年丙戌十月十三日

右六萬恒沙上首上行菩薩此御利益者尓往迹用本名字初隨有喜形相身仕御附屬妙法之要五字弘一天四海秘法良藥施萬人明心大施主等之成就所嚴迷者也

釋迦堂　祖師堂の右ハ並ニ其間ニ廊を備ふ
本尊釋迦多寶四菩薩　當寺往昔眞言宗の時の五智の如來の像ありしと

六浦妙法日荷上人石塔　祖師堂と釋迦堂との間樋の本にあり
一文字中股の石の横面ニ文和二年六月上下とのミ後人造り添るものと有しを中股の石ハ當寺の大檀那中興の石ハ往古のまゝ有り妙法ハ當寺の大檀那十三日と開付ル妙法佑称を荒井平次郎光吉と号建長六年甲寅日蓮大士北總中山ニ於て入滅の相州ニ趣く舎へ帰らんとしるしの日冨木常忍と同船して此六浦ニ着岸あり其頃上人未だ荒井平次郎光吉と称し此妙法上人ニ随従し出家得度の後妙法と号文和二年癸巳六月十三日示寂を依日荷上人と

誌も肖像ハ中山法華寺にあり又妙法の住
旧跡を今の金竜院と米倉家陣屋の
間にいふの地を荒井といふ前の日荷上人ハ持水の条下に詳
記す妙法禅門日荷上人ハ六浦荒井の城主播磨守と
す或ハ此妙法ハ杉田如春と号く七条時頼の臣ありしと云あれとも
いく芳やふもそふる時代あひくし

寶篋印塔　祖師堂の前左の方の山の裾にあり
塔の正面ハ文治元年の銘号を刻せり
當寺往古真言宗なりし證
按ふに米倉家陣屋の上り上行寺の後の山續ハ知足山龍華寺の旧地ありし
と云今も上行寺の後の山より上畑道の号ふ花蔵院橋と号くるものあり八昔竜華寺
支院花蔵院の門前ふあるより橋の号とあり

鎌倉志ハ當寺什宝ハ位牌一枚ありて日祐上人の筆の曼陀羅を
彫其下に日祐上人一世の間引導せし人くの法号俗名残
挙く應安三年と記せり又日祐上人の大曼陀羅及ひ日蓮
大士の消息等を存する由記されしとも今當寺より傳へ
すと云

金剛山嶺松寺　同所三丁斗を隔て西南の方道より右側ふ
あり禅宗ふして建長寺龍峯庵ふ属せる称迦牟尼の
木像を安置せり開山ハ月窓和尚と号し諱ハ元暁紀州の人
二日寂ス俊約翁の法副なり傳へ云當寺ハ千葉介胤義の建立と
鎌倉志ハ瀬戸明神の鐘の銘ふ神主平胤義とあり神主ハ
平姓千葉氏なれハ此人の建立歟千葉系圖ふも胤義と云
有り寺建立のまくを詳なりしと云く

六浦　諱鑑六浦六連或ハ六面ふ作る　東鑑ハ将軍家此地ふ遊覧のふ往く
又同書ハ建久三年壬子二月廿四日丁卯武蔵國六浦海辺ふ
おひく上總五郎兵衛尉忠光を梟首す義盛是をきる
云く又鎌倉大草紙ハ應永四年正月廿四日小山若犬丸ら
子ども二人弱年ありしを會津の三浦左京大夫是を
呂捕鎌倉へ進上しくるを実検の後六浦の海ふ沈らるく
とあり

国立国会図書館　タイトル『江戸名所図会 7巻』 請求記号 839-57
ガラス使用

侍従川
光傳寺

国立国会図書館　タイトル『江戸名所図会 7巻』 請求記号 839-57

ガラス使用

なるを生捕く六面の沖より流れ出るとあるく悪しく興あり

永禄の頃ハ小田原北条此地を領し六浦水曽分の地ハ武田家へ付し同所大道分の地を龍源軒といふ付し地なる由分限帳よろしくも

澤庵和尚鎌倉記行

あられハこの浦の海士の苫屋をもるもはもろ哉　全

海士の苫屋もれあまるをもるもはもろ哉　澤庵

六浦川　此地の道を横きりく流るゝ小溝を云又此溝よ架す小橋を六浦橋と号くといふ

専光寺の辺より光傳寺の辺迄の地の字を川村と称ふ按ふるに昔の水流の旧跡なる方ふかくも吟ふなし〳〵狭

日光山専光寺　嶺松寺より二町計を隔て南の方道より右側よあり浄土宗やゝく同所天然寺よ属を本尊十一面観音八立像一尺計ありと云佛工春日の作なりと云相傳ふ照天姫の念持佛やゝく姫松葉やく爛らもし時身代ふかく立こもふと云傳へくり寺の後の方よ日光権現の宮故ふ山号とも

油堤　同し寺の後の田圃を隔て西の方ふ續きる山を油堤と云由土人云ふ照天姫の乳母侍従とやるもの姫の粧具を携へ此所迄尋来るしかとも姫の形方ふまさるを歎き悲しく彼粧具を捨く終よ此前の川へ身を沈めくもし故よ号とす

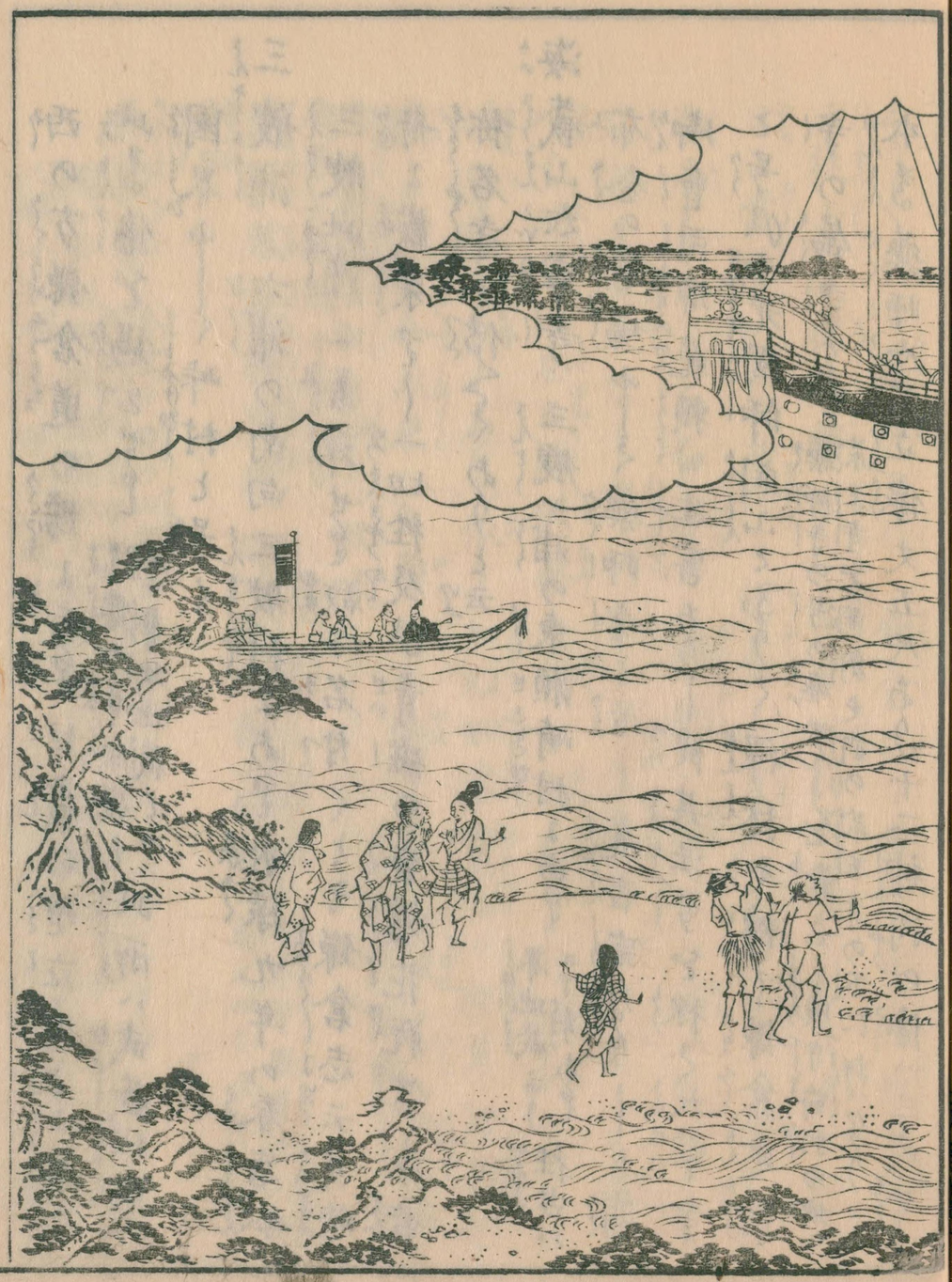
侍従川　川村と大間村との中間光傳寺の前を流る川の

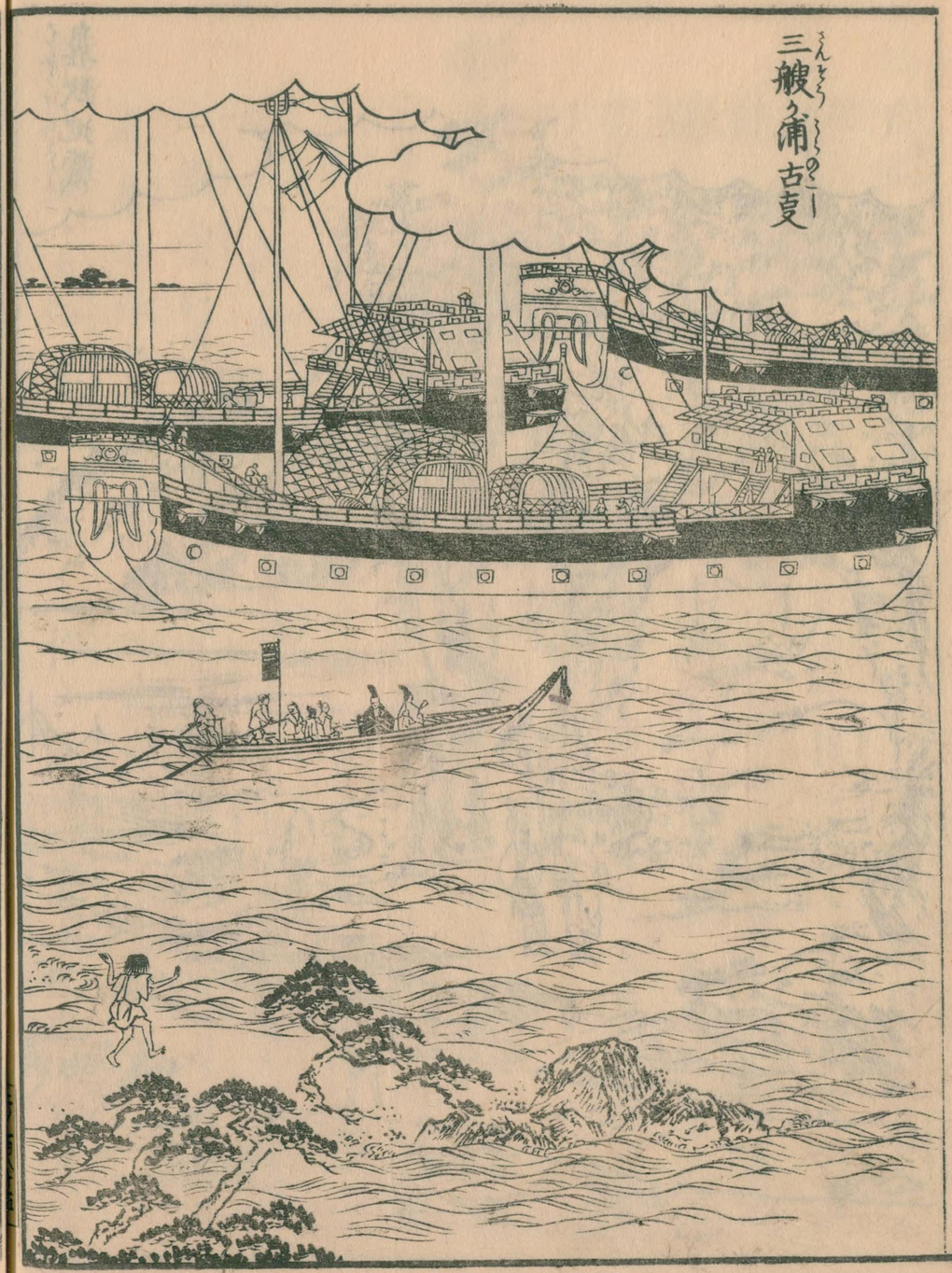
国立国会図書館　タイトル『江戸名所図会 7巻』 請求記号 839-57
ガラス使用

鼻欠地蔵

下流をくゞり水源を鎌倉より發し未ハ三艘村より塩濱へ
出く海灣へ會せ瀬戸街道へ横ゝく架せる橋を侍從
橋と号名義ハ油堤の条下よ云ゝ此橋を渡りて右の
道ハ武蔵相模の國境地蔵の辻へ出く鎌倉へ往還の道
なり南行の道ハ三浦三崎への通路なり左の川傍の道ハ
三艘浦又相州境浦郷等への道なり

常見山光傳寺　同所北の端道より右側侍從川よ傍く
あり淨土宗にく鎌倉光明寺よ屬せる阿弥陀
如来の木像を立像にく四尺半ありく作者あるへくゝ
開山ハ得蓮社忍誉靈傳上人と号ゝ門の内右の方ゝ
地蔵堂ありて本ゐる地蔵菩薩ハ立像六尺半ありく
運慶の作ありと云地福山蔵光寺と号ゝ
界地蔵　土俗鼻欠地蔵と称ゝ光傳寺より九丁あまり





三艘ヶ浦古支

国立国会図書館　タイトル『江戸名所図会 7巻』 請求記号 839-57

ガラス使用

西の方鎌倉道の傍にあり巨巌の壁立しる所に
此る像を鐫出せるも像の鼻缺損せり此所ハ武蔵相摸の
國界にして峠村と号く
三艘浦　六浦の南向三艘村にあり永禄九年の春唐船
三艘此浦に着岸せるを故ありて名付くとぞ鎌倉志云其時
舟に載来るも一切経及ひ青磁の香爐花瓶等を皆
海蔵山太寧寺　三艘ヶ浦の東瀬崎村にあり界地蔵より往古ハ
布金の道場にして薬師寺と号し真言宗なりしを蒲
御曹司源範頼公生害ありし後其法号を採て太寧寺
と号ク千光國師開山とす鎌倉建長
寺の属寺にして薬師寺の号の廃せるを數き年項寺前村の地へ
前の荘王寺の下に詳なり
本尊薬師如来立像丈五尺ありノ十二神将の像ハ三尺許
あり共に運慶の作と鎌倉志に當寺勧進帳をもとく
云往古　伏見帝永仁年間此村に貧女あり父母の忌
日に當るごとに佛に供養しき便なく絲を繰
巻子として賣て佛餉に備へんと思ひ然れとも
容易に買人なく或時童子一人来て是を買ふ価を
以て父母の忌日に供養の料に充よとて佛前に至ると
件の巻子を多くありて依て知ぬ如来貧女の純孝の志を
感しまく自今以来へを薬師と云とあり故に今も此業師
時其祈願成就ハ報賽とて麻苧を脇巻にして
蒲冠者範頼霊牌　堂中に置て定門神像裏に範頼公建久四癸丑年八月と
彫付
範頼墓　本堂の後の山麓にあり高さ二尺六七寸の
五輪の石塔なり墓石もと土中に埋む
按ふに異本源平盛衰記に範頼伊豆の修善寺に浴時
又頼朝より申して伊豆越景時父子三人五百餘騎ゆく修善寺を囲時
其裨面ハ大寧寺殿道悟大禅

国立国会図書館　タイトル『江戸名所図会 7巻』 請求記号 839-57
ガラス使用

題

太寧寺六首

寺樓一抹晩江煙　朝送鐘聲落釣船
老矣身心機事外　閒鷗容我社中眠

殘暁香消柏子煙　老来無夢趁漁船
聞君去借江村宿　一夜鷗邊看月眠

六浦遙連三浦煙　趁風隨岸幾移船
興来撐棹窮佳處　月落前灣猶未眠

山街夕日水籠煙　雪後蘆花月満船
蓋世功名身外事　幾人能得一菴眠

衲衣懶惹御爐煙　還愛華亭載月船
晩興遲留江上寺　三山翠映白頭眠

功名蓋世畫凌煙　失墜竟於艷須船
一錫歸来楓外寺　白沙翠竹閉門眠

當寺書院ハ北ニ向ヒ瀬戸の入海を眼下ニ臨ミ風光殊ニ勝れ寺寶ニ範頼自筆ニ古奇の懸幅及ヒ陣中用ら[illegible]と云長刀一振あり

笘根權現社　瀬崎の東室ニ村ニあり又民家の間ニ犬樟の老樹あり

崔ノ浦　同所の南ニ出崎をいふ菅神の小祠あり故ニ土人ハ天神崎とも称ス此地の海灣を浦の江と云

巾着巖　同所絶壁の下ニあり大さ二間四方ニ盤石ありて潮尽る時形全くあらはる

根附巖　同所百歩ばかりを隔て西南の方ニ崖下ニあるをいふ前の巾着岩ニ比しその名あり

榎戸湊　刀七切村の南の入海を云

田圃雜記　浦川の湊といふ[illegible]

榎戸をさしてそうそす浦川のふかみを乗

道興准后

雀ノ浦（すゞめのうら）

国立国会図書館　タイトル『江戸名所図会 7巻』 請求記号 839-57
ガラス使用

烏帽子島　同所東の出崎の小島をいふ形狀烏帽子に似たる故の名とぞ

鎌倉記行　名所にはあらねどもしるし

夏島　同じく東にあり長三町餘を横一丁斗の小島なり

里人云く玄冬の雪とつもる積りなりとぞ

鎌倉記行　蓑嶋とぞ名のこなり

三ツ石も洋中なれば

猿島　夏島の東南にあり五丁四方ばかりあり

裸島　同所二三町ばかりを離れたる小島なり

按ずるに深庵和尚の漁舍記に笠島とのみ名を擧げて雪詠ぶかくあれとも此島の夕暮ぬれたる岩のみ消えん　洋庵

中を燒こそ、かくいひまぎらはしたるものなるべし

甲香　此れハ金澤の名産なり兼好法師の徒然草に甲香ハ螺貝の様なるが小くして口の程細長くして出る貝の蓋なり武藏國金澤と云浦よりを所の者ハ

とるなりとまうしぬ依てそのよしをいひしるすなり野槌ハ今金澤

にも云とぞ

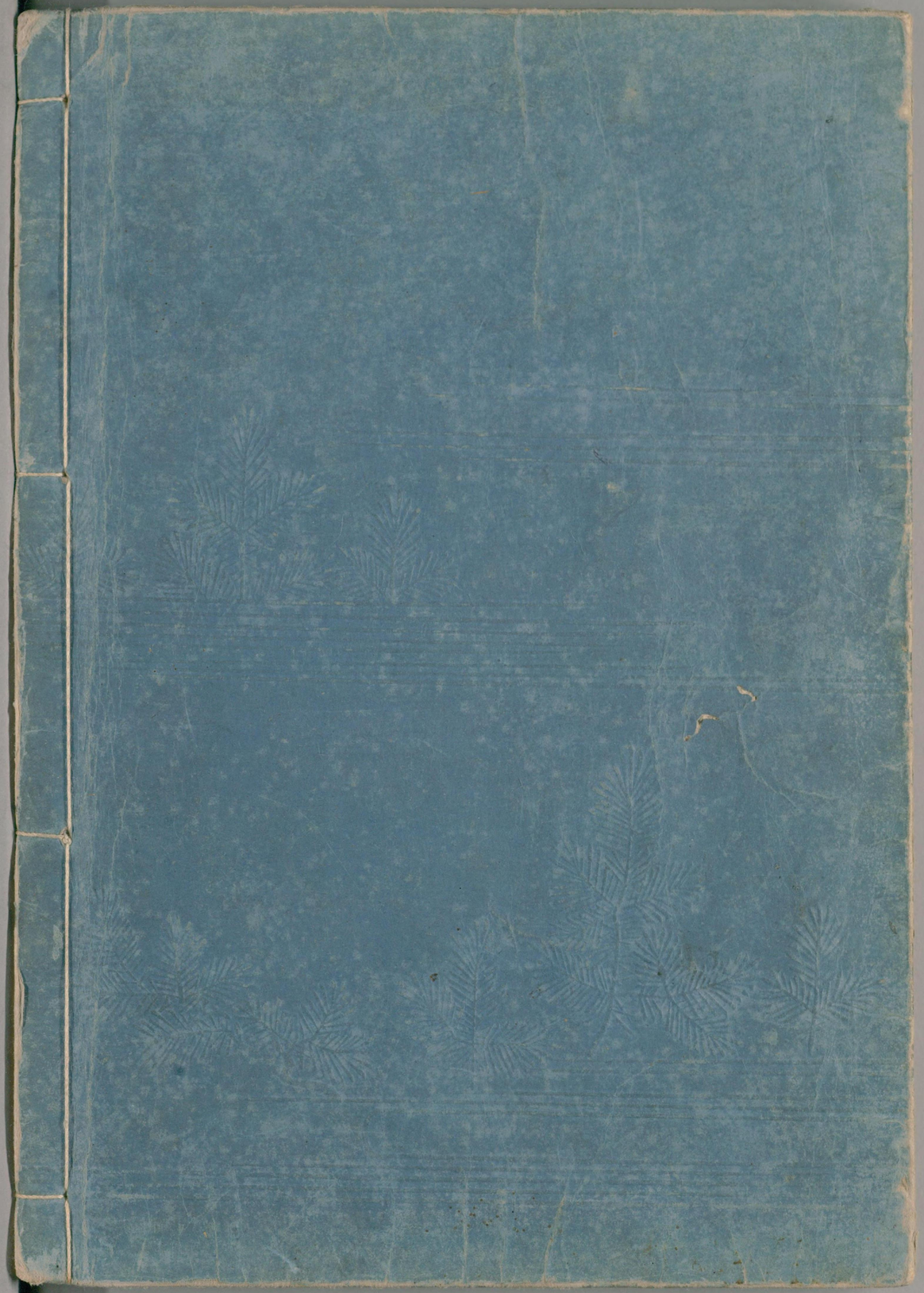
江戸名所圖會天璋之巻　終畢

国立国会図書館　タイトル『江戸名所図会 7巻』 請求記号 839-57
ガラス使用

839
20
57

国立国会図書館　タイトル『江戸名所図会 7巻』 請求記号 839-57

ガラス使用



国立国会図書館　　タイトル『江戸名所図会 7巻』 請求記号 839-57

ガラス使用